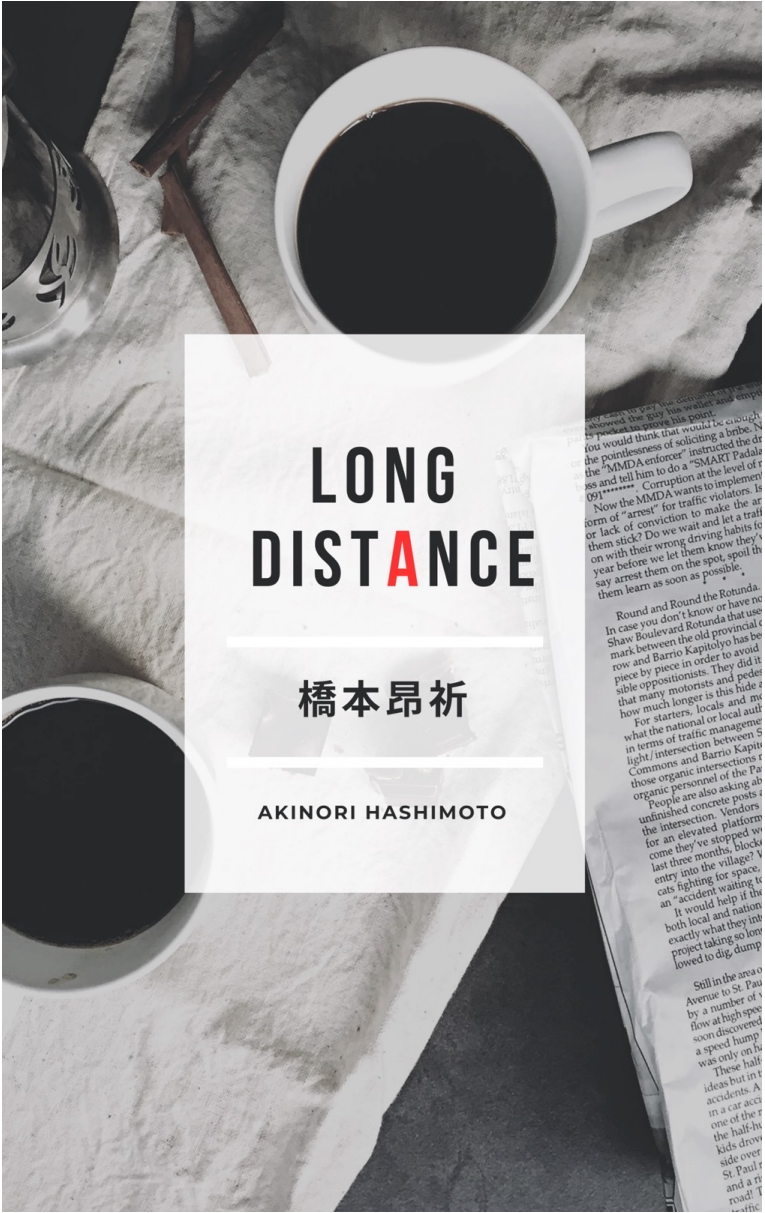




LONG DISTANCE

橋本昂祈

AKINORI HASHIMOTO

9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	9	8	7	6	5	4	3	2	1
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
29	28	26	25	24	21	20	19	17	16	15	14	12	10	8	7	5	3	1

沖本司はノートパソコンをたたむ。その瞬間、虚しさがこみ上げてくる。

「待って下さい！ 先生！ せんせい！」

わたしは力の限り叫んだ。薄れていた記憶が鮮明にフラッシュバックする。あの【密室】に閉じ込められていた辛く苦しいだけの日々。両手足を縛られて排泄の自由さえ奪われた屈辱の日々が脳内をぐるぐると駆け巡る。

気が付けば病室のベッドだった。わたしは医師の診察の結果、精神科の閉鎖病棟に入院となったのだ。いつの間にかコンタクトレンズも外されていてよく見えないが、皮膚を伝うざらざらとした肌触りからして病衣に着替えさせて貰ったようだ。手足の自由は利く。拘束まではされていないはずだ。過去のトラウマが必死に追いかけてくる。絶対に目を閉じてはいけない。目を閉じてしまったら、きっとまた、地獄の業火に焼かれる夢にうなされるだけだ。そして、激しい自己嫌悪に陥り、二度と光をみることはないだろう。

空腹であることを計算していたかのようにタイミングよく看護師が病室に入ってきた。

「佐川リカさん。お食事の時間ですよ！」

絹のような肌色をした看護師が朝食を置いた。淡いグリーンの制服に身を纏っている。ボーイッシュなショートボブの艶やかな黒の髪色からしてまだ20代前半ではないだろうか。今年で29歳になるわたしとはギリギリ話を通じるはずだ。首からぶら下げているネームカードには高野由紀と印字されている。

「今日は和食なんですネ！」

わたしは嬉しくなって言った。だいたい病院の朝ごはんと言えば焼かれてない食パン2枚にジャムとマーガリンといった質素なスタイルが多いからだ。

「ええ。ここの病院はお食事が美味しいと評判なんですよ。今日の夜なんかはから揚げがでるみたいですよ！」

由紀は自分のことのように喜んでいる。ノリの良い看護師でよかった。しかもほんのりいい香りがする。病院の規則では香水はNGだったはずだ。この人はきっと友達も多い。

「高野さんってお名前の通り、由紀さおりさんみたいな方ですね」

お手拭きで手を拭きながらわたしはいった。

「それ、よく言われます！ おじいちゃんが由紀さおりさんの大ファンだったから、由紀って名づけられたみたいです」

「素敵ですよネ。お年を召されるごとに老いるところか輝いていく」

「ええ」

「ところで、昨日診察して下さった先生は……」

「沖本先生ですか？」

「はい」

「先生がどうかされましたか？」

「いえ、なんでもありません」

わたしは恥ずかしくなっていくつむいた。食欲もあまりわかなかったが、緊急入院である以上、無理にでも完食した方が看護師の心象もよくなるはずだ。はやく元氣になれば外出もできないことだろ

う。仮に、医療保護入院だった場合は、医師と保護者の同意のもとに強制的に入院させられる。きっと心配性のわたしの父親が医師に言われるがまま書類にサインしてしまったのだろう。

「ゆっくり召し上がってくださいね。お食事が終わるころまた来ます」

高野由紀は言って病室を出ようとした。

「あ！　そうそう。佐川さんはこの後10時になったら入浴の予定ですので、それまではホールでテレビでも観てください」

「え？　ホールでもいいんですか？」

「はい。医師の許可がでますので構いません。病棟内であればご自由に」

「院外散歩は？」

「看護師の付き添いがあれば大丈夫です。佐川さんはラッキーですね！　沖本先生は人権問題に対してもキチンとしたお考えをお持ちの先生ですから。他の医師だったらまずありえないことです」

「……」

言葉にならなかった。ただ嬉しくて。昨日までのことがすべて嘘だったかのように、わたしの脈は正常に波打っている。不安や恐れと言った感情もわからない。

真冬のエトランゼ。

あの人の色白で華奢な腕に抱かれてみたい。そして、やさしさに包まれて、音、薫り、古い街並み、銀杏並木も雪化粧する冬の凜とした風を胸いっぱい吸って、シリウスの誓の下、口づけを交わす。

またしても散文詩。

天使は牙隠してどこへいく？

行先などない。

流れ流されて遠い異国まで。

この想い受け止めてくれたなら……。

2023年12月24日　佐川リカ

2

重い身体に鞭打って、わたしは病室のスライドドアを開けた。たったそれだけのことで息はあはあとして苦しい。高校一年生で喘息に罹ってからというもの、スポーツ少女だったわたしの人生は急変した。あの緑色のグラウンドを思うように駆け回ることはできない。その寂しさを埋めるように、わた

しは芸術と文学に目覚めた。語学を極めようと決心したのも、遠い異国のどこかでわたしを必要としてくれている人がいると信じていたからだ。

そんなことを思いながら病室を出る。遠くに見えるナースステーションの前には患者さんたちが群がっていた。きっと彼らは朝食後のタバコを吸いに行くために、散歩の許可が下りる時間まで待機しているのだろう。

わたしが多目的ホールまで歩を進めると同時に、鍵がかけられたナースステーションのドアが開き、患者たちのボディチェックがはじまった。多目的ホールは4人掛けのテーブルが10台以上は置かれているように感じた。大型スクリーンのテレビも置かれている。作業療法で描かれたであろう下手くそでヤケにカラフルな絵画が壁一面に貼られている。それを横目に見ながら歩いていく。

看護師の説明によれば、この建物はL字型になっていて、多目的ホールを堺に、女子部屋と男子部屋が別れている。この先は女子であるわたしが入ってはいけない聖域になっているはずだ。そういえば医師以外の男性と関りを持つのは久しぶりだ。わたしは心躍らせた。

遠くからぴょんぴょんと飛び跳ねる様に痩せこけた妖怪のような男が走り抜けていった。ゲゲゲの鬼太郎の世界に来てしまったかのような錯覚を覚えた。

「タバコ！ タバコ！」

名も解らぬ妖怪のような男は、そう叫びながら一心不乱にナースステーションへと向かっていく。行列をなしてまで、または男を走らせてまで魅了してしまう【タバコ】とはいったいどんな麻薬なのだろうか。一説によるとタバコを吸うと脳内から快楽物質のドーパミンが大量に放出されると言われている。ただし、その快楽は一時間も経たないうちに消えて、また次の一本に火をつけてしまう。タバコを吸わないわたしからしたら、ただのニコチン依存症にしか思えない。または、おかあさんのおっぱいが恋しくて仕方ないのだろうか。だとしたら、単なる赤ん坊のまま大人になってしまった可哀相な人たちだ。そんなことを思いながら、ナースステーションへと視線を向けていたわたしは振り返り、男子部屋を通過して、円状の休憩室にたどり着いた。

休憩室はその昔、喫煙所だった名残で壁が黄ばんでいる。180度見渡せるガラス窓の向こうに、懐かしき緑色のグラウンドが広がっていた。わたしは椅子に腰をかけてそれをずっと眺めていた。

「こんにちは！」

可愛らしい女性の声が聞こえて、窓の外を眺めていたわたしは振り返る。ギャル風のメイクをした女の子と無口そうな少年が立っていた。わたしは軽く会釈して応える。

「昨夜から入院したんですか？」

自己紹介もないままに女の子はいう。

「気が付いたらね。病院だったの」

適当な答えが見つからずわたしはそう答えた。薬のせいで記憶が曖昧としているのだ。

「お薬辛いですね。私は明日退院する予定だけど、まだ健常者たちの中でうまく生きていく自信がないです」

そういって、少女は私の隣に腰かけた。

「あの子も最近この病院に入院してきたんですよ」

少女が無口そうな少年を指さしながら言う。わたしはまじまじと見つめる。細身で端正な顔立ち。凛とした眼差し。純粹無垢な赤子のように頬を赤らめて微笑んでいる。陰でモテるタイプだろう。

2023年12月24日。クリスマスイブ。今日はいい日だった。看護師の高野さんが言う通り、夜食はチキンが出た。しかし、から揚げではなく、チキンソテーに付け合わせの蒸し野菜がついているだけのあっさりとした味付けだったので少し物足りなかった。まあケーキまで振舞ってくれたのだからヨシとしよう。親がこの病院に幾らお金を支払っているのかは解らないが、こんな素晴らしい病院を選んでくれたこと神様に感謝しなければならない。

無口な少年の名前は、和泉ヤマト君。明日退院する予定の子は、ついに最後まで名前を聞けなかったのだが、少女はヤマト君に好意を寄せている様子だった。寝る前のお薬を処方されてからしばらくして、喉が渴いたので、ホールにある自動販売機までお茶を買いに行くときに、少女とヤマト君が密会をしていて、盗み聞きをするつもりもなかったのだが、どうやら連絡先を交換している様子だった。

何故だか解らないが、そのやりとりを聞いていて、少しジェラった。久しぶりに感じた嫉妬の炎は、無味乾燥な世界に生きていた私の心を温めてくれた。だけど、私が愛しているのは……

意味もなく泣きそうになる。近くにいるのに、心の距離は遠い。まるでロミオとジュリエットだ。今、時計の針は0時を回った。

メリークリスマス

全ての生きとし生けるひとたちへ

笑顔で幸せでありますように

こんな気持ちになれたこと

それ自体がキセキだ

2023年12月25日。佐川リカ

3

「佐川さん。診察です」

そう言って、看護師の高野さんが呼びに来た。

クリスマスに愛しき人に会える。私の心は踊った。真冬の昼下がり。

診察室はナースステーションの中にある。高野由紀は鍵を開けてわたしを誘導する。診察室の前まで来ると高野さんは「では、中にお入りください」と言って足早に去っていった。

わたしはドキドキしながら診察室のドアを開ける。

紺色のユニフォームに白衣を着た先生が椅子に座ってパソコン画面を眺めていた。

「やあ。佐川さん。体調はいかがですか？」

沖本先生の黒縁の眼鏡の奥に優しい笑みがみえる。

「体調は比較的良好です」

「それならまずは一安心です。まあおかけになって下さい」

わたしは黒い革製のチェアに腰かけた。沖本医師はノートパソコンをみながら言う。

「佐川さんは入院する前の記憶はありますか？」

パソコン画面から私の方に視線を向け沖本医師は言う。

「それが臆けでして……。気が付いたら病院のベッドで寝ていた。という方がしっくりきます」

「なるほど」

言って沖本医師はノートパソコンにタイピングしていく。

「前回の診察では、佐川さんはおかあ様と血縁関係がない、とおっしゃったところで具合を悪くされたので中断しました。佐川さんのカルテにはADHDと診断されていますので、たぶん、再婚された義理の母親という意味でしょうか？」

「ええ。わたしの産みの母親は最低な女でして、幼きわたしと弟を放任して、自身は不倫をしていたのです。父親の留守に乗じて、男を家に連れ込み情事に耽り、挙句、不倫が父にバレたら逆上して、家を出て行きました。まだわたしが小学校低学年だった時の話です。その後、家庭裁判で親権は父親に譲ると決まったのですが、産みの母親は自分勝手にわたしの弟を連れ去っていきました。しばらくは父との二人暮らしが続いたのですが、ある日、父から紹介したい人がいると言われて出逢ったのが今の母親です。もう亡くなっていますが……」

「それはとてもお辛かったですね。すみません、わざわざ傷口に塩を塗るようなことを聞いてしまって。ですが、ADHDの場合、幼き頃の養育環境に問題があるケースがほとんどですので、治療のため、詳細を伺い掘り下げる必要があります。苦しくなるようでしたら無理せずすぐに言って下さい。ゆっくり治療していきましょう」

沖本医師はノートパソコンを閉じた。診察は終わろうとしている。

「先生、一つ質問があります。わたしはどんな職業に就けばうまくいくでしょうか？」

わたしは咄嗟に質問した。

「それはもう少しお話を聞いてからじゃないと解りません。けれども、ADHDの特徴として、文章を書く才能がある方が多いと、医師の間では言われています。ですので、どうか佐川さんも日記や詩を続けてみて下さい。きっと将来力になるはずです」

言って、沖本医師はノートパソコンを抱え立ち上がった。

「ありがとうございます」わたしは身をよじり言った。

「何かしらのヒントになれば幸いです。では」

沖本はそう言い残し診察室を出ていった。

心に棘が残る診察だった。幼き日の回想を話した後、わたしは自然と泣いていた。この涙の理由まで

は解らない。沖本医師が去っていった寂しさなのか。それとも、とっくに乗り越えたとばかり思っていた幼き日の心の闇に、また向かい合わなければならぬ悲しみなのか。物理的には近いはずなのに心は遠い。遠距離恋愛よりも辛い。この言葉にはならない想いが詩となり物語になる。そう信じたい。

4

クリスマス当日の診察後、わたしは看護師付き添いのもと散歩をした。担当の看護師は清楚なタイプの女性で肌の色つやも若々しい。ナース服から立ち込める石鹸の薫り。細身の体に似つかわしくない胸の豊かな膨らみ。ネームカードには【金子玲美】と記されている。美しい容姿から名前から全てがアニメや漫画の世界からそのまま飛び出してきたような完璧無比のお嬢様だ。しかしながら、この世の中には完璧な人間などいない。この女はいったいどんな弱点があるだろうか。

「久しぶりの散歩はどうですか？」

金子玲美の甘い声が聞こえて、わたしは我に返る。

「自然豊かで落ち着きます。心がほっとする」

坂道を下りながら言う。舗装されていない道路。見渡す限り樹木が立ち並びほんのり雪化粧をしていた。ここは本当に東京だろうか。

「良かった！ 久しぶりの散歩だと体調を崩される方もいますので」

玲美は喜々と言う。まさに看護師の鏡ともいえる優等生な発言にわたしは不快感を覚えた。

散歩道に戻る道すがら生理用品を買わなくてはならないと思い

「売店によってもいいですか？」と玲美にお願いをした。

「はい大丈夫です。わたしはロビーで待ってますから。お買い物が終わりましたらお声がけください」

玲美が看護師として優秀であることは解った。きつと散歩に連れ出したことも生理用品が足りなくなることを計算していたのだ。知らぬふりして席を外してくれるのは有り難い。けれども、玲美とわたしは波長が合わない。生年月日を聞いて占うまでもなく相性は悪いはずだ。

わたしはロビーに玲美を待たせて売店へと向かった。精神科病棟の売店は通常ならば、必要最低限の物資しか置いてない。だが、この病院はわりと裕福な階層の人間しかいないせいもあり、売店も街場のコンビニほどの広さがある。向かいにあるこじんまりとしたお店は本屋だろうか。売店の用事が終わったら本屋で小説でも買いたい。

わたしは売店でノートと生理用品と幾ばくかのお菓子を購入した。玲美には悪いと思ったが、買い物自体がすぐに終わったので、向かいの本屋に立ち寄ることにした。

雑誌コーナーの裏側へ足を運ぶ。見覚えのある少年の姿をみつけた。

「ヤマト君？」

「はい」

雰囲気が変わっていてびっくりした。ヤマト君は短髪の髪の毛を整髪剤で固めて立たせている。パンキッシュな髪型と鼻筋の通った端正な顔たちがマッチしている。音楽でもやっていそうな雰囲気だ。これで服装さえを変えてしまえば彼はかなり化けるはずだ。

「ねえ。手に持っているのは小説？」

可愛い年下の弟に接するようにわたしは尋ねた。

「林檎の樹という小説です」

「林檎の樹かぁ。ゴールズワージーの名作よね。恋愛小説が好きなの？」

「いえ、ミステリーが好きなのですが、たまたま手に取ったのがこの本でした」

「じゃあまだ結末知らないんだね。ヤマト君が買うならわたしも久しぶりに読んでみようかな」

「え？ リカさんは読んだことあるのですね」

「うん。わたしたちの世代は恋愛に希薄とか言われながらもやっぱり純愛に憧れていたから。あんまり話すとネタバレになっちゃうし私ももう覚えだから買って読んでみるね！」

「僕も読んでみます」

「読み終わったら読書感想会しようね」

「はい」

ヤマト君はいつのまにか【リカ】という下の名で呼ぶようになったこと。この子はひょっとしたら女泣かせの人生を送ってきたのかもしれない。わたしは思った。だが、素直に嬉しかった。どうしてヤマト君みたいな純真な心を持つ若者がこの精神病院という名を冠した拘置所にいるのだろうか。運命の神様はなかなか皮肉だ。娑婆世界で出逢っていたら、通り過ぎていくだけの関係だったはずだ。読書感想会。この退廃的な入院生活に咲いた、野花を摘むような慰め。釈迦が説く慈悲にも似た、言葉ではうまく言い表せない感情が脳内を支配した。

5

クリスマスの翌日。作業療法に参加してみないか、という看護師の勧めでわたしはホールにいた。リラクゼーションの音楽が流れる中で軽いストレッチをした。作業療法が終わった後はホールにいてヤマト君の様子を観察していた。

ふだん個室にいるから解らなかったが、ヤマト君は他の患者と馴染めていない様子にみえた。たださえ若い男女が少ないとはいえ、アラサー女子4人のグループの中にヤマト君や数少ない若い男子がいて

もおかしくないのだが、どうやらこの病棟を仕切っているのは40過ぎのオジサンのようなようだった。おじさんがスケベ心を出して、自分よりも若いアラサーのグループの中にいて、ハーレム状態を築いている。しかし、アラサー女たちの容姿や言葉使いの汚さからして、まともな神経を持つであろうヤマト君が馴染めないのは当たり前の話だ。たぶんこの病棟で一番イケメンのヤマト君に対する当てつけの意味も込められていることだろう。底辺女たちの宴。なかなか滑稽な話である。

またさらに笑えるのが、マスク越しにはイケメンに見える男性看護師が底辺女たちのグループの顔色を伺うように割って入ることである。

ヤマト君は女たちの底意地の悪さにも気づいてない様子で、澄ました顔で読書をしている。

アラサーグループとは一番遠い席にいるはずのわたしですら、彼女たちが口々に言う【アイツ】とはヤマト君のことを意味する隠語であることぐらい容易に想像できた。大声を出し、わざと相手に聞こえるように悪口を言うのが、わたしたち世代のイジメの特徴でもある。それに相手ののっかってきたら【無視】を決め込むのだ。

ヤマト君はアラサー女のグループの挑発には乗らなかったが、勘違いハーレム男の発言には頭にきた様子でその場を離れて行った。何があったのかと言えば、自分たちが散々ヤマト君の悪口で盛り上がっていただけに、ヤマト君がメモ帳を取り出した時に、勘違い男が「まさか俺たちの悪口書いてるんじゃないだろうな?」と言って、さらに盛り上がったのだった。本当にバカな男や女たちだ。

その様子に気づきながら看過しているのがヘルパーや看護師である。イジメが行われていることに気づかない看護師なんて偉くもなんともない。単なる傍観者であり一番の悪党だ。こうして、人は人を信じることができなくなって学校や職場から離れていく。わたしが観ていない陰で、どれだけヤマト君がイジメられてきたのかを想像するだけでも、虫唾が走る。彼女たちが精神を病んでいることはだれの目にも明らかで、それに対しては誰もなにもいう権利はない。だから、みんな黙ってそれぞれの自由時間を過ごしている。だが、彼女たちが言った悪口の一つ一つを分析すると、相手というよりも自分で自分自身のことを傷つけている。因果応報。誰かをイジメたらそれ以上に自分自身に返ってくる。一生涯、傷つけあうだけの可哀相な人たちなのだ。

ホールから姿を消したヤマト君は再び戻ってきた。ナースステーションの前にいて、ボディチェックを受けている。単独散歩に出かけるのだろう。単独散歩の許可が下りているということは、ヤマト君の退院の日も近いことを意味しているかもしれない。退院したとしたら、こんな場所には二度と戻って来ない方がいい。

わたしはヤマト君の後を追いかけるようにしてナースステーションへと向かった。きっと話したい事が山ほどあるはず。

「佐川さん。診察です」

看護師の金子玲美が私を見つけて言う。

「え? 診察ですか?」

鳩が豆鉄砲を食らったかのような驚きだ。

「はい。先生からの指示です」

玲美は冷静沈着に言ったが、入院中の診察は一週間に一度しかできないという暗黙のルールがあるは

ずだ。ヤマト君の後ろ姿が残像としてよみがえる。ヤマト君との距離は近いようで遠い。

6

「…………。それで、自殺を試みたのですね」

沖本医師は沈痛な面持ちでわたしをみた。

「はい。ですが死にきれなかった。頭悪いですよ、わたし。オーバードーズしたくらいで死ぬるならば、こんなに楽な人生はない」

そう言って笑ってみたわたしだったが、オーバードーズをしたせいで、身体が膠着状態になり、1週間ほど身動きが取れなくなってしまった。内科の医師から退院の許可が下りて喜んだのもつかの間、すぐさま精神科の閉鎖病棟の看護室にて監禁されていた。手足は拘束され、なんのために内科の治療をしたのか解らなくなるほど心は荒んだ。

「生きていること自体、コスパ悪いんですよ」

わたしの正直な感想だ。

「お気持ちはお察しします。でも、生きていれば良いこともあります」

沖本医師は思慮深く言いノートパソコンに入力をしていく。

「先生は生きていて良かったって思う時ありますか？」

突然の質問に沖本は目をまるくさせた。赤子のようなその表情にギャップを感じわたしの内側が熱くなった。

「少ないかもしれませんが、ありますよ」

「どんな時に感じますか？」

「美しい絵画を観ている時かなあ」

言って沖本は一瞬目を輝かせたが、すぐにノートパソコンに目を落とした。

「佐川さんはADHDという診断が出ていますが、私はADHDではないとみています。環境次第で薬は必要ないと考えています。とはいえ、佐川さんのケースではすでにADHDの治療薬が処方されています。この薬は使い方によっては麻薬と同様なので登録制になっています。ですので、一度くだった診断を覆すのは非常に難しい。仮に、ADHDだとしても、佐川さんの場合、非常に軽傷なので退院自体はすぐにでも許可を出すことができます」

「え？ もう退院できるのですか？」

「ええ。ですが、一つお約束していただきたいことがあります」

「なんでしょうか？」

「もう二度と自殺をしないと誓えるならば、退院を許可します」

「誓います」

「では、ケースワーカーと看護師にも退院の方針で調整させます」

「先生。私は病気ではないかもしれないのですよね？」

「過去にうつ病の傾向性があったにせよ。現在は病気ではない可能性が高いです。しかしながら、あくまでも私の見解になります」

「だったら、退院後も先生が診て下さい」

「わかりました。実は、退院日などもなるべく年内にできるよう動いています。1日2日はゆっくり過ごされて下さい」

「ありがとうございます」

わたしは診察室を出た。ナースステーション内は相も変わらずバタバタとしていて、師走の街並みと人の雑踏を連想させた。

「診察終わりました？」

看護師の怜美が気づいてくれたようだ。その声は不思議とわたしに安心感を与えてくれた。相性が悪いと決めつけていた自分が馬鹿らしくなった。

その日の零時を過ぎた頃、照明が落とされた薄暗いホールにて、ヤマト君と二人きりで話す機会が訪れた。

「退院ですか？」

私を買ってあげた缶コーヒーを握りしめてヤマト君が言う。

「うん。病気でないかもしれないって」

「そんなことあるんですね。それで、具体的にはいつになりますか？」

「詳しくはまだ解らないけれど、ケースワーカーに聞いたら、土日でも退院できるんですって。だから、30日の土曜日にまで伸びるかもしれない」

「もうリカさんと会えることもないんですね……」

そう言った時のヤマト君は今にも泣きそうな表情をしていた。私は持っていた【林檎の樹】の余白に連絡先を書いて渡した。

「これ……」

ヤマト君の表情が明るくなった。男という生き物はなんて単純なのだろう。

「内緒だよ。退院したら手紙でも頂戴ね」

まるで神様が図ったかのように夜勤の看護師が「お願いですから寝て下さい」と注意をしにきた。

「はい。解ってます！　じゃヤマト君。おやすみ」

一方的に告げてわたしは個室に戻った。沖本医師に感じたドキメキとダイヤの原石みたいな男の子に感じた甘酸っぱい気持ち。この瞬間、わたしは世界の誰よりも幸福な女だったかもしれない。

2023年12月27日。

明日、退院することに決まった。看護師の高野さんが昼下がりに伝えにきた。単独でも散歩できる身分だったが、無理を言って高野さんに付き添いをお願いした。真冬の東京は清々しいほど晴れている。

「もう明日の今頃は退院されてますね！」

顔をくしゃくしゃにして高野さんが言う。

「ええ。お世話になりました」

「退院したら真っ先にやりたいことはなんですか？」

「そうだなあ。ケンタッキーのチキンが食べたいかな」

言ってわたしは青空を見上げた。

「やっぱり病院食じゃ満足できないですよね」

腕を組みながら高野さんは頷く。

「でも、ここの病院は美味しかったですけどね」

「それだけがうちの病院の長所ですから」

言って高野さんはケラケラ笑った。

「高野さんはご結婚とかされないんですか？」

「しないですよ。だって相手がいません」

「高野さんだったらすぐにいい人現れると思うな！」

「ありがとうございます。佐川さんは結婚に興味ありますか？」

「ないと言えぱうそになります。けれども、理想ばかり高くてなかなかいい男子に巡り合えないです」

「それ、みんないいですよ。もっと上の世代の人たちは、恋愛は自由だっていうけれど、結婚を前提としないお付き合いなんて正直めんどくさいです」

「解ります！ でも、友人の話ですけど、なんとかなしに身近にいる男友達に身を委ねちゃうってこともあるから気を付けないとですね」

「それって、セフレってことですか？」

「たぶんそうじゃないですかね」

「恋愛しなくても性欲は満たしたいのか」

深く考え込む高野さんをみて不憫に思った。この方の友人はきつと真面目な人しかいないのだろう。

「あ！ 猫だ」

「本当だ。可愛い！」

迷いネコが現れたおかげで話題を変えるチャンスだった。けれども、高野さんは恋愛についてどうしても話したいことがある様子だった。

「佐川さんは沖本先生についてどう思われます？」

「医師としてとても優秀な方だと思います。立派な大学をご卒業されていて、実家もお金持ちみたいですが、庶民的な一面があって好感がもてます。それに、あんなにじっくり話を聞ってくれる先生、なかなかいません」

素直にわたしがいうと高野さんは渋る顔をした。

「ここだけの話ですけど、沖本先生はかなりのプレイボーイらしいので、佐川さんも気を付けたほうがいいですよ」

高野さんは親切心から忠告をした。

「そんな風には見えないですけどね」

噂の類は信じないようにしている。高野さんの忠告は有り難いが、沖本医師が遊んでくれるならば、身を委ねる女はかなりいるだろう。

「あの先生少し変わってるんです。あの先生に関わるとろくなことにならないです。看護師の金子さんいるでしょ？」

「怜美さんですよ」

「怜美ちゃんも沖本医師に熱を上げてるから、心配で仕方なくて……」

「ご忠告ありがとうございます。わたしも沖本先生に熱を上げてたかもしれませんが、でも、患者と医師の間にある壁は破れないですよ。高野さんのお陰で正氣に戻れました。ありがとうございます」

「いえ、こちらこそ話にお付き合い頂き感謝です。佐川さんは退院なされるのですから余計なお節介でしたね。すみません」

「いえ、お氣になさらずに」

高野さんは知らなかったのだ。沖本医師は都内のクリニックで週二回ほどアルバイトをしていることを。そして、そのクリニックにわたしが通うことも。高野さんには申し訳ないが、これじゃどっちが看護師でどっちが患者か解らないような話の内容である。今のところ、沖本医師が他のクリニックに勤務していることを知る者は多くない。

沖本司と金子怜美の関係性だけが不透明ではあるが、わたしにだってチャンスが巡ってくるかもしれない。

冬の空は透き通るほど美しい。吐く息の白さに懐かしさと愛しさがこみ上げてくる。ロングディスプレイス。物理的に届くはずのない祈り。長い長い夢の物語の幕開けを連想させた。

年末の蒲田駅は閑散としていた。大田区最大の歓楽街の蒲田。治安の悪さで有名だが、あいにく一人暮らしのわたしですら危険な目にあつたことはない。もっとも、夜になると中国人女の客引きやキャバクラの呼び込みなどが現れて、男性をターゲットにあたりかまわず声をかけているから、わたしの知らぬところで事件が起きているのかもしれない。

本屋で雑誌を立ち読みした後、スーパーに立ち寄った。今年は実家に帰らない予定だから、おせちセツトでも買っておきたい。美容雑誌に紹介されていた毒だしスープの材料とおせちを購入して店を出た。すっかりと暗くなつた街をすり抜け、環状八号線を道なりに歩く。

部屋につくとまさきに換気線のスイッチを入れた。建物が木造なので声をかき消すためである。幸いなことに隣の住人は比較的静かにしてくれているが、たまに2階から奇声が聞こえてくることがあり、かなり迷惑している。きつとわたしだけでなく近隣の住民も迷惑していることだろう。

ケトルのお湯が沸いた音がした。お気に入りのマグカップにココアを入れてお湯を注ぐ。トーストにバターを塗り、ママレードジャムをトッピングする。ソファに座り、パソコンからジャズをかけた。友人から勧められて購入した藤原涼子という人気ジャズピアニストのアルバムは、わたしの生活の一部になっている。美貌と才能、そして内面からあふれ出る気品と知徳。有名私大のK大学通信教育課程に在籍しているわたしからしたら、藤原涼子は大先輩にあたる。

ジャズピアニストの藤原涼子を調べようとしてネットサーフしていたら、橋本アキラという占い師にたどり着いた。なかなか予約が取れない占い師らしい。京急蒲田駅近くの雑居ビルで個人鑑定をしているようだが、そのような看板は見かけたことがない。橋本アキラは小説家になるために占い師になったとブログに書いている。きつと紹介でしか占わないような占術研究家なのかもしれない。わたしはスピリチャルの類は信じない無神論者なのだが、人生の節目では何度か占って貰ったことがある。付き合っている相手もいないのに「あなたは来年結婚します」とか「このままだと地獄に落ちます」だとか「あなたの家系は呪われているから厄払いが必要です」と脅すような占い師にばかりに縁してきた。そのせいで、占い師にいいイメージを持っていなかった。だが、橋本アキラという占術師にはなぜか心惹かれる。歌い踊り小説を書く占い師。こんなにも自由気ままに生きている人間ならば複雑なわたしの心の闇も理解してくれるに違いない。もっとも、頭がキレル彼のイメージ戦略にまんまとハマってしまっただけかもしれない。

シャワーを浴び終えてパジャマに着替えた。時計の針は22時を回ったばかり。入院していたとしたら消灯の時間だ。ヤマト君は今日も眠れずに薄暗いホールにいるだろうか。

林檎の樹。読書感想文など大げさなものは書けないが、遠距離恋愛の末、ついには清らかなまま天国へと旅立つヒロインの悲恋の物語。このヒロインみたいに純粹無垢な心で生きたらどんなに良かったことか。天国で神々に愛され、もう二度と下界へ生まれ変わる必要もない。沖本医師との距離が近くなる

につれ心の距離もちかくなるはずだ。この愛は成就するであろうか。淡い恋心をそっと胸にしまい、わたしはヤマト君に手紙をかくことにした。

9

年が明けて3が日も過ぎるころには街に活気が戻ってきた。朝早くコンビニへ行くと作業着姿の男性を多く見かける。実家からの仕送りだけで生活しているわたしは恵まれすぎているのかもしれない。ミルクと菓子パンを買ってコンビニを後にする。

郵便受けを覗くと一通の手紙が入っていた。きっとヤマト君からだ。はやる心をなだめながら部屋に入り、手紙を読む。

佐川リカ様

心温まるお手紙ありがとうございます。お元気そうで何よりです。リカさんからの手紙を読んで、早く退院したいという気持ちになりました。僕の場合、統合失調症と診断されていますので、退院したらまずは障害者手帳を申請することからはじめようと考えています。もしこのまま働けなくなったとしても、障害年金が下りるはずですから、将来のことはゆっくりと静養しながら考えようと思っています。真心のアドバイスありがとうございます。

話しは変わりますが、リカさんは蒲田にお住まいなのですね。僕は生まれは世田谷なのですが、親が五反田にマンションを持っていて、その一室を借りて一人暮らししています。蒲田は隣街という認識です。五反田はいちおう山の手エリアに属しますが、風俗街とかもあって治安が良くないところが蒲田に似ています。僕は餃子やラーメンが大好きなので、中華屋さんが多い蒲田にはよく遊びに行きます。僕の母は手芸用品を買いに蒲田へ行くみたいです。占いや天然石のお店も多いと言っていました。僕も占いや天然石が大好きなので退院したら蒲田を散策してみたいです。

自分の話ばかりになってしまいごめんなさい。

林檎の樹の感想もありありがとうございます。リカさんがおっしゃるように、主人公は身勝手な男だったかもしれません。僕はギリシャ神話を讀んだ後にこの作品を讀んだからか、ヒロインが神になる物語として受け止めました。神の立場からすれば人間は欲深き罪びとでしかない。作者の意図までは解りかねますが、ヒロインの視点から読み解くと、きっと神々の園に戻れてハッピーエンドだったのだと解釈しています。だいぶひねくれてますかね？ 笑

またおすすめの小説があれば教えて下さい。

和泉ヤマト

PS お体だけのご自愛くださいませ。

わたしは育ての母親のポートレートに手紙お供えした。手を合わせて祈る。この無垢な青年が幸せであることを。そして、今日も何事もなく慎ましく一日がおわりますように。

10

深夜過ぎて電話が鳴った。

ひょっとしたら父からの電話かもしれない。

反射的に暗闇の中でスマホを手に取り電話に出る。

「お父さん？」

言ったわたしだったが、応答はなかった。

嫌な予感がしてきた。スマホをみると見知らぬ番号だった。

「リカ。久しぶり……」

「誰？」

「俺だよ。昭仁」

とっくに記憶の彼方に消えていた元カレだった。

「こんな遅くにどうしたの？」

「声が聴きたくて。でも元氣そうでよかった」

「何かまたトラブルに巻き込まれているの？」

「いや。大したことじゃない。そんなことよりもリカは大丈夫か？」

「大丈夫だよ。買い物にも行けるし病氣もない」

「そうか。それならよかった」

「彼女さんとお別れでもしたの？」

「いや。彼女はいない。リカが最後だったよ。リカはいい人いるのか？」

「いるよ」

「そうか。俺の出る幕はなさそうだ」

「もしかして……」

「ん？」

「いや。なんでもない。もう二度と電話してこないでね」

「悪かった。もう今日で最後にするよ」

「じゃ今度こそ。サヨナラ」

「ありがとう。元気でな」

通話を終えた後、懐かしき記憶が蘇ってきた。

恋人関係だったあの頃、わたしは軽い鬱病と摂食障害を患っていた。満足に買い物にも行けないような辛く苦しい時期にも、代わりに買い物をしてきてくれた。過食嘔吐により食べた物を吐くときも笑って許してくれた。わたしは彼の優しさに甘えすぎていたのだ。今は病気でないかもしれないという可能性も示唆されているが、まだ安心はできない。ありえないが、ヤマト君と恋仲になったとして、うまくいく可能性はかなり低いだろう。軽度とはいえ、統合失調症の彼の面倒をみれるほどわたしは大人ではない。つらい記憶の彼方にあった封印してきた想い。今度こそ本物のシンデレラになりたい。

11

蒲田から京浜東北線で有楽町へとたどり着いた。地下鉄日比谷方面へと歩いていく。イルミネーション瞬く冬の日比谷は多くの外国人が行きかっていた。これから銀座へと流れてくのであろう。

クリニックで受付をして待合室のソファに腰をかける。予約制ということもあり、患者は片手で数えるほどしかいなかった。沖本に会える嬉しさとは裏腹に、元カレの昭仁のことを想うと息苦しくなる。どうやってわたしの連絡先を知ったのかは解らない。それが不気味でしかたない。だが、懐旧の情に浸っていたのも事実だ。別れの憂鬱。それでも愛を渴望する欲深き人間。女の性であり、わたしの弱さだ。

『佐川さん。診察室にお入り下さい』

アナウンスが流れ、わたしは診察室へ向かった。

木製のドアを3回ほどノックし「失礼します」と言って診察室に入った。デスクの奥に沖本医師が座っていて、笑顔で出迎えてくれた。書棚にはユングやフロイトなどの分厚い本が並べられていて、ここは精神科なのだと再認識した。

「やあ리카さん。調子はどうですか？」

友達にでも話しかけるように沖本は言う。

「おかげ様でだいぶ調子よいです」

「ご実家には帰られましたか？」

「いえ。お正月に実家に帰ると、病気が再発しそうだったので帰りませんでした」

「病気というのは摂食障害のことですか？」

「はい。実家で過食嘔吐すると父親がとても悲しい顔するんです。まるでこの世の終わりみたいな」
「そうですか」

「次に実家に帰るとしたら、ピアノが弾きたくなった時だと思います」

「ピアノ？ リカさんはピアノ弾けるんですね」

「ええ。そんなにうまくないですけど……」

「クラシックですか？」

「はい」

「僕は音楽のことはよくわからないのですが、大学の後輩にジャズピアニストがいます」

「ひょっとして藤原涼子さんですか？」

「ご存じでしたか？」

「知ってます。わたし涼子さんの大ファンなのです。彼女のお陰でK大学の通信教育課程に通い直そうと決意したほどです」

「ということはリカさんも後輩ってことだ」

沖本は頭の後ろに手を組み、背もたれに深くよりかかった。

「すごい偶然ですね」

「涼子君だったら、今月の17日に大きなコンサートホールでライブやる予定らしいね。行ってみたらいいんじゃないかな？」

「実は入院のバタバタで予約できなかったんです。行ける人が羨ましいな」

「あ！ チケットなら大丈夫だよ。涼子君のライブだったらOB会の方で取ってある」

「え？ でも、先生に悪いじゃないですか」

「その日、僕は学会があるから、チケットが余っていたんだよ。リカさんが行ってくれるなら涼子君も先輩として嬉しいことだろう」

「じゃあお言葉に甘えて」

「ただし、リカさんには悪いけれどすべて指定席なんだよ。たぶんリカさんの隣は僕の友人が座る。友人が迷惑をかけたらすまない」

「いえ、こちらこそ、ご迷惑にならないように気をつけます」

「よろしく願います。調子がよさそうなのでお薬は寝る前だけにします。ADHDのお薬は必要なさそうです。しばらくは一週間に一度のペースで来て下さい」

沖本が言って診察は終わった。

佐川リカさんへ

お手紙ありがとうございます。そして、秘密を打ち明けて下さり、重ねて御礼を申し上げます。

こちらの病院でも沖本先生は患者さんや看護師さんからモテモテです。金子怜美さんと沖本先生がどのような間柄かは解らないですが、たまに庭のベンチで仲良くお話ししている様子をみかけます。けれども、高野さんがいうような女たらしには見えません。(そう信じたい)

【病気でないかもしれない】と言われたことに関しては、僕も同意見です。リカさんは病気にはみえないし、言動もしっかりしていた。なぜ精神科の病棟なんかにいたのか不思議なくらいです。僕の前輩にもリカさんのような方はいます。軽度のうつ病だったら治ると思います。僕も自分のこと病気だと思ってません。幻聴に関しては神と繋がった状態だと考えてます。ですが僕の場合は、幻聴があると現実世界で生きづらいのでお薬はきちんと飲む様にしています。リカさんはいずれ薬すらいらなくなると思いますよ。さて、少しか僕の前況をお話しさせて頂きますね。

医師が言うには、病状は安定期に入り、そろそろ外泊も許可が出せるそうです。しかし、入院した経緯が複雑なので、まずは世田谷の実家で静養してもらって様子をみたいと言っていました。外泊の許可と共に、携帯電話の使用許可も出せるみたいです。

リカさんのお役に立てるかは解りませんが、僕からみた沖本先生の様子などをご報告できればと思っています。

寒い日々が続きますのでお体ご自愛くださいませ。

和泉ヤマト

ヤマト君からの手紙を読んで妙に納得してしまった。わたしはADHDの気はあるにせよ、薬は必要としていない。むしろ摂食障害の方がつらい。食べたい気持ちを我慢できず、つい食べ過ぎてしまうと、不安に感じて吐いてしまうのだ。部屋に食べ物があると気になって全部たべしてしまう。だからわたしは必要最低限の食糧品しか買わない。

摂食障害は薬では治療できない。実家からの仕送りもいつまで続くか解らないから、そろそろアルバイトもしなければならぬ。そのことを思うと勉強も手につかないのだ。医師に恋をすることは現実逃避かもしれない。物理的な距離が近づくにつれて、恋に陶酔してる自分がある。これが最後でありますように。多くの女たちが願っていることだろう。

蒲田から横浜方面の電車に乗り、桜木町で降りる。街はレインボーカラーに照らされて、恋人たちは肌を寄せ合う。ジャズのライブは港町が良く似合う。見知らぬ橋を渡って行くとき、遠くの方に観覧車が観えた。フッドライトの光がこぼれて水面に輝きを放っている。ライブ会場がある馬車道までは約10分ほどで着く。ムーンナイト・セレナーデ横浜のキャパシティは約300席。一般的なジャズクラブが50席だからかなり大規模のライブといえる。さすがは国内屈指の人気ジャズピアノリスト藤原涼子だ。クラブの前まで来た時に、違和感を覚えた。時間通りにきたはずなのに、お客さんの姿がみえないのだ。藤原涼子のライブは開始前から熱心なファンが並ぶことで知られている。一人もいないのは不自然だ。ライブハウスのロビーに入ると受付の女性が一人いて、私をみて深々と礼をした。

「佐川リカさんですか？」

黒い制服を着た女性が尋ねてきた。

「そうです」

「お話しは伺っています。ライブは始まっておりますので、お席までご案内します」

受付の女性はインカムマイクに「ご案内お願いします」という。コートとバッグをクロックに預けているうちに、エレベーター奥から赤い制服の女性がやってきて案内してくれた。

メインフロアの2階にあがると、鍵盤を激しく叩きつけるようなピアノ音色が聞えてきた。この曲は藤原涼子のライブの定番曲である【月と狂気】だ。

わたしが案内された席はピアノから遠い席であった。にも関わらず、ピアノの旋律は激しさを増すように猛スピードで駆け抜けていく。

美しい容姿を持ち、さらにはK大学出身の完璧無比なお姫様の涼子だが、心には深い闇を抱えているのだろう。どんな人にも等しく訪れる光と闇。今の人気があるのは、それだけ深い闇を経験しなければ、このような舞台には立てない。

涼子のピアノソロライブは緩急を織り交ぜ、時にMCで笑いを誘うようなお茶目な一面も垣間見えて、ドリンクを頼むことも忘れていた。喉の渴きを覚えて、店員さん呼び、アイスカフェラテをオーダーしようとした時だった。わたしの隣の席に、見覚えのある顔が座った。モノトーンのシックな装いに真珠のネックレス。金子怜美だった。

怜美は看護師という仮面を外すと、艶やかな雰囲気を漂わせていた。シャネルのココにも似たスパイシーな薫り。ナース服の上からでも解った丰满な胸の膨らみを、わざと協調するかのようなニット服。官能的ですらある。怜美は会釈して席に座った。

沖本の友人が来るとは聞いていたが、てっきり男性だと思い込んでいた。まさかこのようなフォーマルな場所で見守りに会わせるとは、沖本はどのような神経をしているのだろうか。

怜美が現れてからはライブに集中できず、気が気でなくなっていた。沖本と玲美は恋仲なのだろうか。ま

た、付き合っただれくらいの日数が経過しているのだろうか。今夜、怜美に聞き出したいことは山ほどあった。

ライブのファーストステージが終わり藤原涼子は控室へ去っていった。ブルーライトに照らされていた照明がオレンジ色へと変わり、会場の全貌が明らかになった。次のステージが始まるまで約30分間、怜美と二人でやり過ぎなければならぬ。

「リカさん。お久しぶりですね。お元気でしたか？」

いつもと変わらない怜美の態度に面食らった。

「ええ。おかげ様で」

それ以上、言葉がでなかった。怜美は気を利かせてメニュー表を差し出した。

「今日は司さんのおごりらしいですから、遠慮せずに好きなものを食べましょ！」

「わたし飲食代はちゃんとお支払いします。ただでさえ、チケットを手配して下さったのに。これ以上ご迷惑をおかけするわけには……」

「いいのよ。男なんて所詮、ATMですから」

「そんな風に思ってたのですか？」

怜美はわたしの質問に答えなかった。言っただけ無言でメニュー表を眺めていた。怜美は手を挙げてボーイを呼ぶ。

「3種のスモーク盛り合わせと牛フィレ肉のサイコロステーキセット。それから、グルメアンサンブル。あと、マルゲリータとナポリタン！」

ボーイはかなり戸惑っていた。二人でも食べきれない量ではないからだろう。しかし、深くまでは聞いてこなかった。

「お飲み物はいかがなされますか？」

「シャンパンがいいな。この店で一番高いのでお願い。リカさんもシャンパンでいい？」

「わたしはアイスカフェラテを」

わたしが言うと、ボーイは奥へと下がっていった。

14

藤原涼子のライブは素晴らしいモノだった。感動に浸る余韻を残して涼子はステージを後にした。玲美がオーダーした料理やドリンクのほとんどが食べかけのままテーブルに残された。怜美はシャンパンをジュースみたいにながぶがぶ飲んでいたわりには、さほど酔っているような素振りをみせなかった。

観客のほとんどはお会計をして早々と帰っていき、涼子の関係者と思われる客だけが残されたライブ会場。わたしもあの感動を胸にしまいながら早々に帰ったが、ライブ終演後に、怜美が「今日はわたしの誕生日だったの」とぼろっと言ったので、最後まで付き合うことにしたのだ。

「あーあ。わたしの誕生日も、あと1時間ちょっとで終わっちゃう」

沈黙を破るように怜美がいう。

「失礼かもしれませんが、沖本先生と過ごされる予定だったのですか？」

「ええ。わたしのATMですから」

「……。好きなんですネ。先生のこと」

「あんな男を好きになるもんですか」

言って怜美はシャンパンを一気に飲み干した。

「リカさんが司のこと好きならば、これだけは言える。やめといった方がいいわ」

「好きもなにも、いちおう医師と患者という立場ですから。ありえません」

「リカさん。いいのよ。私には本音でぶつかって来て。わたしとリカさんはもう立派なお友達ですから」

「友達……」

「そう。オトモダチ」

「なら怜美さんの方が先に言って下さいよ」

「何を？」

「その……。沖本先生との関係性」

「誰にも言わない？ 特に患者さん」

「言わないです。約束します」

「司とはただのお友達よ」

「そうなんですか」

「セックス付きのね」

「え？」

「だから単なるセフレよ」

開いた口が塞がらなかった。沖本先生に限ってそんなはずはない。

「では、恋人だったんですネ？」

「今日まではね。でも、アイツはわたしの誕生日をすっぱかした。挙句に、別の女をよこした。最低なやつ」

怜美が言った矢先、わたしたちの背後から「お！ 飲んでますね」という甘い声が聞えた。振り返ると、藤原涼子だった。

「涼子さん？ シャンパンで良ければ飲んでってください！」

怜美が促すと、

「ありがとうございます。でも、私、禁酒中なんですよね」

藤原涼子は持っていたグラスを傾け「カンパイ！」と可愛く言った。

「お隣の方は？」

「司のお友達のリカさんです」

怜美がいい

「いえ、単なる大学の後輩です」

わたしはうやむやにした。

「では、わたしの後輩ってことになるね」

「あ！ 言っても通信教育課程ですし、まだ卒業もしてません」

わたしがいった言葉は涼子にはスルーされて

「ライブはどうでしたか？」と尋ねてきた。

「感動以外の何物でもありません。特に、アンコールで弾かれた曲が妙にわたしの心に響きました」

「ああ。あの曲ね。ってことはリカさんもいい人がいるのかしら？」

「え？ なぜ解ったのですか？」

わたしが聞いかけると涼子は遠い目をした。

「あの曲は、まだタイトルもつけてない新曲でね。わたしにもリカさんみたいに、大切に想っている人がいるんだけど、中々、会いにいけなくてね。会いたけれど会えないひと。そんなセツナイ想いを曲にしてみたの」

「会いたいけど、会えないひと」

「リカさんはまだお若いでしょう？」

「29歳です」

「だったらいずれ解るときが来るわ。たとえ、物理的に遠かったとしても、会いたくても会えなかったとしても、心はいつもそばにいる。そんな二人でいたいかな。でも、いつかはハッピーエンドで幸せになりたい。少し哲学みたいな話になっちゃったね！」

涼子は少女のような笑みを見せた。39歳にはとてもみえない。

「いえ、勉強になります！」

わたしがいうと

「怜美ちゃん！ 今日ちゃんと家に帰るんだよ」

言って涼子は去っていった。

藤原涼子のライブの後、怜美とは頻繁に連絡を取り合う仲になった。怜美は夜勤をやらせてもらえないらしい。もっとも、それは彼女にとって都合の良い契約なのだが。帰る時間がいつも同じなので、毎日のように電話やメールが来る。お互いに沖本との関係が壊れた現在となっては、全ての秘密を共有できる唯一の友達だ。怜美の勧めもあって、わたしは週に一度だけコンビニのアルバイトをはじめた。怜美がいうにはお金のことならば心配いらないが、文章を書く適正があると思うから、社会との接点を持つておいた方がよいとのことだった。というのも、わたしがお酒に酔った勢いで、うっかり遺産の話をしてしまったからだ。わたしの育ての母親は眼科医だった。勤務医でありながらも、横浜の一等地にマンションを買い取るほどに経済的成功をおさめていた。資産価値としては億を超えていたそう。たぶん独身時代のお給料のほとんどを資産運用にまわしていたのではないかと父はいった。いわゆる、財テクの鬼のような母親であった。父親はその恩恵にあずかり、建築の設計士として独立開業した。しかし、母親が乳ガンになったことがきっかけで、父親は介護に専念するため、設計事務所の社長の座から降りた。山梨県の富士山が見える場所に家建てたのが父親の最後の仕事だった。父が設計した最後の家は、亡き母への愛が溢れた素晴らしい家だった。スロープがあるのは当然として、畳の部屋の段差すら転ばないようにと細心の注意を払っていたのが、建物の素人のわたしにも解るほどだった。

こんなにも家族から愛された母親だったが、友人には恵まれなかったように思う。お金で繋がる関係は、最後はお金の問題で破綻した。葬儀に來たのはほとんどが父方の親族で、母の友人はほとんど來なかった。あんなに賑やかで華やかに見えた交友関係を持つ母親だったが、みんな離れていったのだ。

そのような話を飲みの席で怜美にしたら、

「リカは小説を書く人なんだよ」

と言って泣いてくれた。

事実は小説よりも奇なりで、本当はもっとドラマティックな話はたくさんあるのだが、物語を書くようにとかならず途中で心が折れる。怜美は精神科の看護師という職業柄、たくさんの歪んだ人生をみてきたという。アルコール中毒、ドラッグ、性犯罪。それらは氷山の一角。それをきいたわたしは怜美のほうこそ小説家に向いているのではないかと言ったが、守秘義務があるため難しいようだ。ともあれ、かなり気が強くないと精神科の看護師は務まらない。清楚な服を着た女の方が実は性に奔放だったりするみたいに、見た目だけでは性格は判断できない。ナース服を着ている時の怜美とプライベートの怜美では、かなりギャップを感じる。怜美はぬいぐるみがないと寝れないほど甘えたがりなのだ。

コンビニのアルバイトは意外に楽しい。夕方17時から22時までの5時間勤務なのだが、駅から遠い住宅街にあるコンビニなので、20時を過ぎるとお客もあまり來ないので、商品の前出しをしているふりをして、店員同士でお喋りしている。週一回のアルバイトと診察。病気ではないかもしれないと言われた以上、もはや診察の意味があるのか、甚だ疑問に感じるが、怜美と沖本の間を知った上でもな

お、わたしは沖本に淡い気持ちを抱いていた。

16

怜美の休日に合わせて三浦海岸に來た。彼女が突然「海がみたい」と言ったからだ。冬の海は輝きを増し、晴れ間が広がる太陽の恩恵を受け、怜美の悲しみを癒してくれるだろう。

浜風が吹き、わたしの黒いロングダウンジャケットの裾がひらひらと踊った。怜美は真っ白いコートにスカイブルーのマフラーを巻いていて、凜として美しい。彼女の黒いブーツが砂浜の上に足跡を刻んでいた。わたしが男だったら、別れ話をきりだすカップルを演じているかのような日常的一幕。波音がかき消していく。出逢い、別れ。

「リカ。人間ってなんのために、生きているのだろうか」

怜美は言っただけだ。沖本との別れを惜しむかのようだ。

「楽しむため。じゃないかな？」

言っただけは海の彼方を観た。

「なんか仏教哲学みたいだね」

「宗教チックなことしか言えなくてごめん」

「いいんだよ。リカは哲学者なのだから」

「そんな大げさな。ただ大学で哲学を少し学んでいるだけだよ」

「司……。いや沖本先生か。沖本はね、気丈なようでとても繊細なの」

「そうなんだね」

「うん。実は大学時代にイジメにあって辞めてるし」

「え？」

「沖本の家系は代々、法曹の世界で活躍してきたらしいの。父親は優秀な弁護士として活動した後、代議士になった。地元では知らない人はいないくらい立派な家柄だね」

「じゃあ司という名は、法に司るって意味かな」

「名前の由来までは解らないけれども、たぶんそうだと想う。父親は地盤を継がせるために、自分と同じ道を歩ませようとした。だから、司は弁護士になるために上京してきたの」

「その後、なぜK大学の医学部に？」

「彼自身、精神を病んだからよ。リカなら想像つくでしょ？」

「ひょっとしてASD？」

「そう。さすが頭がいいわね。ASD。自閉症スペクトラム症候群」

「ASDは一部では天才的な方も多く見受けられる。ひとつの物事に執着する短所も良い風に解釈すれば、勉強に打ち込める才能を意味している。」

「リカ。沖本は頭がいいのは事実よ。だけど、彼を神格化しない方がいい」

「怜美には悪いけれど、やっぱりわたし……」

「ASDと知っても諦められないの？」

「危険だって自分でも解ってる」

「……。わかった」

言うと怜美はバッグから何かを取り出した。

「これ、沖本の住所と連絡先」

無言でわたしは受け取った。別れたばかりの彼女から連絡先を貰う。なんて無神経な女なのだろうか。連絡先を知ったところで、何の役になるのだろうか。怜美の悲しみと引き換えに、幸せを得るのだとしたら、女の友情なんて浅はかで脆い。怜美の気持ちを裏切ったわたしは最低な女だ。

17

2月に入り寒さが一段と増す中、ヤマト君に手紙でも書こうと思った矢先、電話が鳴った。ヤマト君からだった。

「ヤマト君。元気？」

「はい。夜分遅くに電話してしまいすみません。リカさんはどうですか？」

「わたしはちょっと色々あってさ。ちょうどヤマト君にお手紙書こうと思ってたところなの」

「そうですか。何があったのですか？」

「わたしね。コンビニでバイトしてたじゃん？」

「はい」

「変な客からストーカーされてるのよ」

「え？」

「部屋まで特定されちゃってね。引っ越したいんだけど貯金もないし」

「お父様にお借りすることはできないのですか？」

「それは無理だよ。父親にはアパートの更新代を出してもらったばかりだし、心配かけたくないから……」
「そうですか。五反田で良ければお貸しすることもできます」

「ヤマト君と住むってこと？」

「いえ、たまたま6階に空き部屋があるので」

「お家賃はおいくらかしら？」

「家賃は要りませんよ。僕が親に交渉します」

「そんなわけにはいかないわ。よく考えたら、ヤマト君だってまだ静養しているのだし、この話は忘れて……」

「警察には相談しましたか？」

「したよ。何回か見回りに来てくれたけど、それで終わり。事件性がないからこれ以上は動けないって……」

「こんなこと聞いていいのか解らないですが、男はどんな特徴を持ってましたか？」

「典型的なオタク。太って長髪で背も低い。戦ったらわたしでも勝てそうなくらいなひ弱な男」

「そうでしたか。では、僕が守ります」

「守るって……。ヤマト君変なこと考えないでよ！」

「リカさん。長くなるけど聞いて下さい。はじめてリカさんを観た時から、赤の他人という感じがしませんでした。リカさんは先に退院されていききましたが、そのあと、僕はずっと孤独でした。病棟内での嫌がらせやいじめにあうたびに、これはチャンスなんだって、言い聞かせてました。そんな暗い日々の中でも、リカさんから手紙が届くと、心は天国にいるかのように踊りました。そして、封を開けて読むとまた身体に電撃が走るのです。リカさんの文章は、文学の神様から愛されているかのように自由でいて、日本語の美しさを余すことなく使いこなし表現されている。年下の僕が言う問題でもないですけど、リカさんはきつと文学者が適職なんだと思います。僕はいちおう大卒ですが、リカさんに触発を受けて、K大学に通いなおすことにしました。内緒にしてみましたけれども、昨夜、小論文を書き上げたばかりです。僕は文学部を志望しています。未来、リカさんのお役に立てるように、僕も必死に学び続けます。僕はリカさんのことが好きです。いや、好きとかを通り越して愛しています。リカさんは沖本先生に恋をしていることも解ってます。だから、僕はいつまでも待ってます。たとえば、リカさんが40歳になっても、50歳になっても、今のように変わらずに愛していると伝えるまで、僕は自分を磨き続けます」

ヤマト君の長くて熱い告白を聞いて言葉にならなかった。

無言のままどれくらいの時間が経ったのだろうか。

気づいた時には、通話は終わっていた。ヤマト君の気持ちは嬉しい。けれども、この物理的に会えない遠い距離間こそが、ヤマト君の心の中でわたしを神格化してしまったのだと思った。藤原涼子の言葉から引用すると、会いたいけど、会いにいけない。わたしにはヤマト君に会う資格がないのだ。

怜美にストーカー被害のことを相談したら「うちにきなよ」と言われた。てっきり、一夜だけのことかと思ったのだが、わたしはそのまま怜美の部屋に転がり込んでしまった。怜美が借りている部屋は、東京港区の閑静な住宅街にあった。駅前にはスーパーやお洒落なカフェがあり公園も多い。港区の中では比較的、家賃が安いのもかもしれない。

怜美から渡された沖本の住所をスマホに入力して、地図検索してみたら、案外近くに住んでいることが判明した。横浜生まれのわたしは東京都心の土地勘がない。

最近の診察では、沖本と雑談をして終わる。何のために病院に通っているのか、不思議に思うくらいだ。だが、沖本は決して自分からは「もう来なくても大丈夫」とは言わない。3分心療とはいえ、毎週会っているから、話のネタも尽きてきて、ついには大学のレポートの書き方などを教わるほどになった。家庭教師を雇うよりも安あがりだ。ストーカー被害の恐怖におびえながらも、週一回は蒲田のアパートに立ち寄ることになっている。とはいえ、怜美が休日返上で付き合ってくれているのだが。その際に、大学関連の書籍や衣類などをスーツケースに入れて、電車で運ぶのだ。

2月上旬のとある日、いつものように、スーパーへ買い物に行き、怜美の制服をクリーニング屋さんにとりにいき、後は帰って、夕食の支度をするだけだった。わたしは両手に買い物袋を持って、下町風情溢れる商店街をすり抜けて、長い坂を歩いていく。住宅街まで来ると神社の近くには公衆電話がある。珍しく誰かが公衆電話のボックスの中にいる。黒いロングコートを着た40歳くらいの男性に見える。わたしの直感が働いた。あれは沖本司だ。怜美と寄りを戻しにきたのだ。迂回しようにも運悪く、怜美の部屋までは、この長い坂をあがるしか道がない。しかし、今日のわたしは赤いフチの眼鏡をしているので、気づかないだろうと腹をくくり、公衆電話のボックスを通り過ぎようとした。神社の横を通り過ぎる時には、心の中で神さまに祈った。その願いが通じて、沖本に気づかれることなくわたしは怜美のマンション前までたどり着いた。気が抜けてへろへろと力なく道に座り込んだ。「大丈夫ですか？」

聞きなれた声がしてハッとした。

見上げた先に、手を差し伸べる沖本司の姿があった。

「コーヒーでいいですか？」

「お構いなく」

お構いなくと言われても、ここは怜美の部屋だ。怜美だったら質問するまでもなくお茶くらいですだらう。さっと、インスタントコーヒーを淹れてリビングルームにいる沖本に差し出す。

「リカさん。どうぞ座って下さい」

「先生に言われなくても座ります。だって、ここは怜美の部屋ですから」

「そうでしたね。お金を出してるのはわたしですが……」

「え？」

怜美とは全ての秘密を共有する友達だったはずだ。親友と言っても過言ではない。それでも、まだ隠し事があったなんて。信じられなかった。

「怜美と寄りを戻しにきたんですよね？」

「いえ、違います」

「では、いったいなんのため？」

「あなたを迎えにきたんですよ」

「え？」

戸惑うわたしをみて沖本は微笑んでいた。

19

18時を過ぎて沖本が帰っていき、その30分後に怜美が帰ってきた。沖本が来たことは絶対に怜美には言えず、その様子を彼女なりに不審に思っていたことは間違いないと思うのだが、怜美はいつもとおりわたしが作った料理を食べて、お風呂にはいり、二人でアニメを観てゲラゲラと笑い。「明日も早いから」と言って早々と寝てしまった。

お互いに全ての秘密を共有できる友達だと思っていた。わたしはまたしても怜美を裏切った。2LDK、一人暮らしだったら広すぎるこの部屋。怜美の部屋のセミダブルのベッドは、かつて沖本司と愛の言葉を重ねた、想いで深き場所だったはずだ。怜美に買って貰ったシングルの布団。この場所こそがわたしの聖地だった。ストーカー被害に怯え、コンビニにも行けなくなってしまったわたしを救ってくれた大切な友人。あのお洒落なお店が立ち並ぶ商店街も、遠くから観た東京タワーのイルミネーションの美しさも、何もかもが壊れてしまいそうで、わたしは絶望した。イタリアンのお店でパスタとピザを頼み、分け合って食べたことや料理が苦手な怜美が「カレー作ってあげる」と言って、説明書きを読みながら一所懸命に作ってくれた懐かしき味。

リビングルームにて思い出に浸っていると、たまらなくせつなくなり、怜美の部屋に布団を持ち込んだ。暗い部屋で「寝れないの？」と玲実の声だけが聞えた。

「今日はちょっとね……」

「ぬいぐるみいる？」

「いや、そこまでは」

壁に向かって半身になって横になっている怜美のすぐそばで、布団を敷き、身体を大の字にして寝れ

る。それだけで幸せだった。

「リカ」

「なに？」

「今日さ。沖本来たんでしょ？」

「……………」

「寝たの？」

「そんなことあるわけないじゃん」

「そう。野暮なこと聞いてゴメン」

「いいんだよ」

「おやすみ」

「良い夢を……」

真夜中、身体の芯が熱くなる想いがしてなかなか寝付けなかった。

沖本司のASDとは思えない、甘い言葉に乘せられて、わたしは彼に身体を委ねた。甘い口づけを交わし、彼の繊細な指先がわたしの秘部に触れた時、わたしは無抵抗のまま彼の指使いを堪能した。気が付けばわたしは衣服を脱がされ、彼のペニスがわたしの膣の中へはいっていた。「君が欲しかった」と低い声で耳元でささやかれ、嘘とは解っているながら、快感の渦に溺れていく。頭がおかしくなりそうだった。

回想に浸っていると眠くなってきた。寝ていたと思っただけの怜美が「今までありがとう。元気でね」と言った。そのありがとうの言葉はなんだか悲しかった。怜美はわたしは沖本のもとへ旅立つことまで解っていたのだ。薄れゆく意識の中、怜美が幸せであることを祈ることしかできなかった。

20

翌日、6時に起きたにも関わらず怜美の姿はなかった。いつもだったら、私の方が早く起きて朝食をつくり、怜美を起こす係だった。

怜美の寝室からリビングルームへ行くと、テーブルに一通の手紙があった。そこにはこう書かれていた。

親愛なるリカへ

リカ。お友達になってくれてありがとう。

最初は患者と看護師という立場で出逢った。

そもそも、お友達になれるはずなんてなかった。けれども、お互い共通の友人を介して

こんなにも仲良くさせて貰えて、感謝しています。

リカは病気なんかではないと私もそう思っている。

リカには沖本が必要なかもしれない。

けれども、ADHDの気があるリカとASDの沖本が

一つ屋根の下で暮らしていくのは大変だと思う。

わたしはリカと行動を共にしていて、

時々、（あれ？）と思う瞬間がありました。

「ちょっとだけ待ってて」といったきり、

30分も待たされた時は、

正直言って本当にADHDなのかな？とも思いました。

けれども、わたしは職業柄多くの患者さんをみてきて、

リカは病気ではない。

あくまでもそれを含めての個性なのだ、と私は確信しています。

沖本に関して言えば、ASDの傾向は明らかで、

リカはまだブライベートの彼を知らないから

懂れだけで沖本のもとへ旅立つのだとは思うけれど

それは、また今度の機会にお話しします。

お別れを言うのと辛くなるから、今日は早めに出ます。

時が経てば、また二人で笑って過ごせるチャンスがあるはず。

このマンションも、私の経済力では維持できません。

だから、最後にリカと過ごせた楽しい思い出とともに、

わたしも旅立つ覚悟はできています。

また、どこかの海で逢いましょう。

金子怜美

女の友情は成立しないと思っていた。でも、それは間違いだった。怜美はわたしより4歳も年下だが、考え方がわたしなんかよりもずっとしっかりしている。別れ際もスマートだ。

わたしはスーツケースに衣類をまとめ、大学のテキストは沖本の家に送ることにした。そろそろ2月になろうとしている。蒲田のアパートにも、衣服を取りに行かなければならない。不気味なるストーカー。アイツさえいなければ、こんなことにはならなかったはずなのに。怜美に言わせれば、それすらも、創作の糧だと励ましてくれるが、こんな人生をおくるくらいなら、二度と人間なんか生まれ変わりたい。ヤマト君のような純粹無垢な青年と怜美のような美しい女こそ、たくさんの子孫を残してほしい。切に願う。

2月になり椿の花が咲く頃、わたしは沖本司の運転する車で青山に向かっていた。旧型の黒いBMWは沖本のこだわりが込められているらしい。この車に乗るたびに司はBMWへの愛を熱弁するのだが、わたしは車に興味がないので、適当に受け流すことにしている。車をパーキングに止めて少し歩くと煌びやかな街並みに場違いな服装で来てしまったことに恥ずかしさがこみ上げてきた。司はそんなことはお構いなしに足早に歩いていく。ドラマや雑誌でしかみたことない、司は青山の高級ブティックに入っていた。わたしは店の前でためらっていると、店の中から店員さんが出てきて挨拶してくれた。

店内はシトラス系の爽やかな香りがしていて、マネキンに春物の新作が展示されていた。値段をみるのも恐ろしい。とてもじゃないけれど、ファストファッションで来るようなお店ではない。

「彼女さんですか？」

店員のお姉さんが司に尋ねる。

「ええ」

司は不機嫌そうに言った。

「今日はカジュアルなパーティーがあるので、適当にセレクトして下さい。じゃあリカ、15分後くらいに戻ってくるから」

言って司は店を出て行った。

彼が店を出て行ったのを確認して

「今夜は素敵な夜になりそうですね」

店員さんはにこやかに言った。

店の奥からセレクトターの女性がやってきて、手には数着の衣類を持っていた。

「今年は緑がトレンドになりそうです。まだ春物を着るには肌寒いので、緑をベースにタータンチェックのコートなどが良いでしょうか？」

セレクトターの女性は的確にいう。

「わたしファッションは疎いので、お任せします」

「では、さっそく試着してみして下さいませ。お客様は癒し系で可愛い可愛い雰囲気を持ってますから、今年のトレンドとぴったりくるはずですよ」

促されるままにわたしは試着室で着替えた。昨晚の司との情事をついたキスマークが赤く腫れていた。今夜もまた司はわたしを求めてくるだろうか。

試着室をでると

「素敵です！ こんなにもタータンチェックが似合うお客様は初めてです」

セレクトターの女性が褒めちぎった。演技だと解っているながらも天にも昇るような思いだった。

「ありがとうございます。普段は選ばない色だから嬉しいです」

わたしが言ってる間に、司が戻ってきた。

「沖本先生いかがですか？」

セレクターが言うとは無言でクレジットカードを差し出した。

店を出ると路肩にBMWが停まっていた。司はエスコートすることもなく運転席に座りドアのロックを解除する。わたしが助手席に乗るのを確認すると車は走り出した。

「パーティー楽しみなだね」

わたしは無邪気にいう。

「パーティーなんか行かないよ」

含み笑いを浮かべて司がいう。車は首都高速に乗った。土地勘のないわたしだが、港町に向かっていくことはなんとなく解った。

22

海沿いのホテルに連れて来られた。彼がわたしを欲しがっていることは手に取るように解る。司は興奮すると鼻がひくひくするからだ。

司はベッドサイドに腰を掛けタバコに火をつけた。

「脱げよ」

司はクールに言い放った。

「シャワー浴びてくる」

「さっさと脱げ」

言うとは彼は眼鏡を外した。こんな暴力的な人だとは思わなかった。帰りたくても帰れない。わたしはさっき買って貰ったばかりの服を脱ぎ始めた。

下着姿になったわたしは愛しい司の横へ座った。口づけをねだろうとした時に、彼はずっとわたしの両手に手錠をかけようとした。

「ちょっと！ やめてよ！」

必死に抵抗したわたしだったが、力では勝てない。押し倒されて、まんまと手錠をかけられてしまった。司はわたしの陰部を撫でる。

「いい感じに濡れてるな」

「ん！」

彼の指先がクリトリスを優しく刺激し続ける。身体が熱い。脳内はドーパミンが出っぱなしで、昇天しそうだ。

「ああ。こんなに愛液だしちゃって。エロいな」

顔の近くで愛液に濡れた指を見せつけてくる。

「どうして欲しい？」

意地悪に彼はいう。

「いれてください」

「ちょっと待ってろよ」

そう言って司は携帯を取り出した。

しばらくして、マスクをした若い男が部屋に入ってきた。わたしは恥ずかしさで消えてしまったかった。

「おい。今日の相手が来たぞ」

「先生。これは……」

言ったのは聞きなれた声だった。

「ヤマト君？」

「リカさん……」

ヤマト君は呆然と立ち尽くしていた。

「和泉くん。さあ、こっちに来て一緒にプレイを楽しもう」

司がヤマト君に歩みようとした。こいつはバイセクシャルなのか。

「先生。どうして？」

力なくヤマト君がいった。

「君は童貞なのだろう。女性の素晴らしさを教えたくてね」

司はヤマト君の頬を撫でて、キスをしようとした。

「やめてください！」

ヤマト君はどんと司を突き放して言った。

「なぜなんだ？ この女のこと好きなんだろ？ 裸が見たかったんだろ？ 好きなだけなじっていいんだぞ？」

「……。うわぁー」

叫びながらヤマト君は出ていった。

23

わたしは傷心のまま蒲田のアパートへ帰ってきた。司の異常なまでの性癖に付き合わされて、心が疲れ切っていた。こんなわたしを天国の母はどう思うだろうか。大学のテキストは放りっぱなしのまま。何も手につかない。生きていること自体が地獄のようで、食料品を買い物に行くことすらままならない。この辛い過去をかき消したい。

スマホを手に取り、着信履歴を開く。なんとなく悲恋に終わるのではないだろうかという勘が働き、元カレの昭仁の番号をそのままにしておいた。誰でもいい。ぬくもりが欲しい。ほぼ無意識のうちに、昭仁に電話をかけていた。繋がらない。時計は20時半を過ぎている。昼職だったらとっくに帰って、来て夕飯もすましているはずだった。ひょっとして夜勤でもやっているのだろうか。昭仁は仕事を転々としてきたから、今はどんな仕事に就いているのかも解らない。

2階から工事現場の騒音よりも不快な叫び声が聞こえて、わたしはストーカーのことを思い出し震えた。この地獄のような日々はいつまで続くのだろうか。

わたしは2階から聞こえる奇声をシャットダウンするため、スマホにイヤホンを繋いだ。動画サイトを開くとトップに恋愛カウンセラーのチャンネルが表示された。しばらくはつまらなく見ていたのだが、ホストにハマっていく女性の心理や状況を解説する場面では、まさしく現在の私の心境にぴったりときて、なぜだかは解らないが安心した。

誰でもいいから傍にいて欲しい。つらい恋愛を忘れるための処方箋は恋愛しかないのだ。わたしはマッチングアプリを検索した。その中でわたしにぴたりくるサイトを見つけた。恋愛サイト【レターズ】レターズは詳細な個人情報を入力することによって、GPS機能や買い物履歴や閲覧履歴などをトラッキングし潜在的なニーズを読み解き必ず運命の相手に出逢えるというのが特徴らしい。有料にはなるが、人気占い師のサポートも受けられる。わたしは好奇心の赴くままレターズへ登録していた。

24

2月14日、世間はバレンタインデーで盛り上がっている最中、わたしもレターズに夢中になっていた。顔さえよければだれでもいい。わたしは自暴自棄になっていた。性欲は盛んな方ではないが、今な

らば浮気や不倫に走ってしまう女性の心理が痛いほど解る。愛する男に騙され、利用され、公衆トイレみたいに性の奴隷扱いされ、ボロ雑巾みたいに簡単に捨てられた。それが一般男性ならば、まだ責任は自分にもあると割り切れる。だが、相手は精神科の医師。信じられない。

不思議とレターズに夢中になっている時は、過食嘔吐も起きず、平穩無事に過ごせている。寝食をわすれるほどの集中力がADHDと誤診されてしまった理由であろうか。

サイトには顔がいい男たちがずらりと揃っている。写真だけみればエキゾチックなソース顔からあっさりとした塩顔までイケメンパライスだ。後は、お金さえ持っていればなおよいのだが、レターズの会費自体が高額なため、変な人がいないのも嬉しい。が、パパ活目的に使うユーザーもいるので、その辺りはよく見極めなければならない。

わたしはユーザー名【アキラ】という男性占い師にハートを送った。近場で出逢って、手っ取り早く肉体関係を持って、憂さを晴らしたい。今のわたしには恋人関係とか彼氏彼女とか煩わしくて仕方ない。女だって性欲を満たしたいだけの時がある。それをいちいち、Z世代の恋愛は特殊だとか、時代は変わったとか言われても、知ったことではない。古今東西、恋愛には色んな形があって当然なのだ。

ホットココアを飲もうとしてカップを口にした時、『ピコン』という通知音があった。スマホには『アキラさんとマッチングしました。メッセージが届いています』

そのように表示されていた。

『初めまして。占い師のアキラです。ハートありがとうございます。ルナさんは占いに興味ありますか？メッセージお待ちしています』

アキラからのメッセージを読んで確信した。この人は蒲田で占い師兼インディーズ作家をやっている橋本アキラだ。わたしは興奮した。

『メッセージありがとうございます。占い大好きです！ぜひ、占って下さい』

わたしはアキラに個人情報を送ると『鑑定結果が出るまでしばしお待ちください』というメッセージがきた。占いにいい思い出がないわたしが、アキラという男にはとても興味がある。ギターが弾けるそうだが、果たして夜のテクニクはどんな具合だろうか。エロいことに妄想を膨らませているとアキラからメッセージがきた。

『ルナさん。お待たせしました。四柱推命と琉球占術で占ってみました。ルナさんは芸術の才能があります。繊細で傷つきやすい一面もあるでしょう。また、衣食住に恵まれる星を持っていますので、豊かな人生が歩めます。他人から信用・信頼されやすい一面があり、親切な人です。けれども、おっちょこちょいな一面もあります。そのユニークさがルナさんのウリです。また、抜群の集中力を持ち頭が良いです。運気が上がるカラーは黒と白。ここ一番の勝負時には青を身に着けて下さい。運気があがる数字は1と6です。ぜひ、何かのご参考になれば幸いです』

鑑定結果を観て、軽い身震いがした。まるでわたしのこれまでの全行動パターンを観て来たかのような鑑定結果だったからだ。しかし、黒と白はあまり好きではない。ピンクが一番好きなので残念に思った。『凄く当たってます。当たりすぎて怖いくらいです。先生、わたしの今年の運気はどうなっていますか？』わたしは興奮してメッセージを送った。人気占い師に鑑定してもらっているだけでも会費を払っている以上の価値がある。レターズに入会して良かった。

『残念なのですが、運氣は正確な鑑定書を出さないとみれないですよ。それに、僕個人としては運氣の良しあしを語るのには好きではありません。仮に運氣が最悪だとしたら憂鬱な気持ちで一年を過ごされる方もいますし。まあスピリチャル的な解釈では、運氣があるのは事実です。神様からの試練の時期や準備の時期、または開運の時期、様々あります。ですがそれではあまりにもつまらないので、一つだけ言えるとするならば、仕事、恋愛、結婚、学業、健康など色々な運勢をひも解いていくと、ルナさんの運勢は試練の年です。が、ピンチはチャンスです。ルナさんが今、一番困っていることほど大開運します』（なるほど、試練の年か）

わたしはこの占い師にだったら全てを話しても良いと思った。そして、この身と心を委ねても良いとすら思えた。

『連絡先。教えてくれませんか？ 鑑定料はお支払いします』

わたしはメッセージした。抗えない大人の魅力、彼の知的溢れる発言、包容力、わたしは惹かれつつあるのかもしれない。

『ルナさんと僕は合わない方が良いです。僕は対面鑑定はやっていませんし、何かあればこちらにメッセージ下されば幸いです。』

アキラからのメッセージを読んで愕然とした。彼は運命の人と結ばれるために占い師になったとブログに書いてあったが、わたしは彼の何者でもないのだ。

『では先生。ひとり占って欲しい人がいます。1980年11月18日生まれ。男。わたしの相性を教えてください』

わたしは送信してホットココアを飲んだ。しばらくして返事が来た。

『ルナさんが相手から壊される関係性ですね。ぱっと見は刺激的なので運命に感じることも多いですが、悲恋に終わる可能性が高いです』

沖本とわたしの関係性を占ってみると、こんなにも簡単に因果関係がはっきりでてしまうのか。

『これはあくまでも宿曜占術という月の暦から占った結果です。僕が使用している琉球占術では相性は出ません。もしご興味がありましたら、僕の師匠がセミナーを開催しますので参加してみてください』

25

灰色の空模様、東京のイルミネーションが瞬く。寒さ厳しき2月中旬の品川駅中央口は人で溢れかえっていた。スーツ姿の会社員たちは、談笑しながら明るい表情で街へと消えていく。アフターファイブを心から楽しんでいる様子だ。女性たちは聡明でキラキラとしてみえる。わたしの地元横浜の人間は口々

に、東京の人間は暗いと言うが、わたしからしたら田舎者の嫉妬にしか思えない。世界有数の大都市の東京は街ごとに色んな人種がいる。それぞれの夢を追いかけているのだ。

この世の中は、時間を売ってお金を得るか、お金に縛られずに自由に生きるか、生まれながらにお金の苦労から解放された人々の3パターンしかない。きっとこれから出会う人々は、お金の苦労から自由になりたいくて成功を目指している人種が多いはずだ。海外でつくられた健康食品や化粧品を会員にだけ売る仕組みは、ねずみ講といって禁じられているはずなのだが、なぜか法の隙間を縫ってグレーゾーンで存在し続ける。一般的にセミナーと言えばそんな印象だろう。わたしはその手の勧誘にだまされたことはないが、友達の話を聞く限りでは、口八丁手八丁で会員になるまで帰さないこともあるらしい。今夜の開運セミナーはどうだろうか。

わたしは橋本アキラの言うことを全て信じているわけではないが、彼が勧める運気が上がる色を取り入れてから、心なしか物事がスムーズに運んでいる気がしていた。アパートから駅まで行く際に、赤信号に引っ掛からなかったり、UFOキャッチャーで欲しいぬいぐるみが獲れたり、くじ引きで景品が当たったりした。特に、1と6という数字を意識しだしてからは、判断に迷うことが少なくなった。

品川駅を出て高輪方面へと歩いていく。丘の上にある品川プリンスまでの道すがら、国道15号を走る車のヘッドライトがキャンドルのようにゆらゆらと瞬いて、妖艶な夜を演出している。

ホテルの受付でセミナー会場を確認して、エレベーターでメインタワーの16階へ向かう。会場にはいると、色とりどりのお洋服を着た男女がワイングラス片手に会話を楽しんでいた。テーブルには料理や飲み物が用意されている。セミナーとは名ばかりで、ブッフエスタイルのパーティーのようだった。

「お飲み物はいかがですか？」

占術師風の若い男性がわたしに言った。紺ブレに赤いネクタイを締めている。ほんのり良い薫りがして息を飲んだ。

「ウーロン茶を……」

男はさっと手を挙げてボーイを呼ぶ。飲み物をオーダーすると、すぐに別のウェイトレスがウーロン茶を持ってきた。

「ご挨拶遅れました。私はミラクルスポット専属占い師の奥本と申します。お名前をお聞きしてもよろしかったですか？」

言って男は名刺を差し出した。

「奥本さんですね。はじめまして。わたしは佐川リカです」

「リカさんの紹介者はどなたですか？」

「橋本アキラ先生です」

「ああ蒲田のアキラ先生ですか。今日は来られていないですよ。こんな素敵な女性を一人にしておくなんて。罪な男だ……」

「ところでミラクルスポットってなんですか？」

「沖縄にある占いと天然石のお店です。アキラ先生のご紹介でしたらすでに占いをされると思いますが、運氣が上がる色や数字、方位などを算出して教えています。リカさんはひょっとして白と黒ですか？」

「え？ どうして解ったのですか？」

「今夜のリカさんのお召し物がモノトーンで統一されていてらっしゃるので、白と黒かと。また、わたしは他の占術師と違って透視やチャネリングもできます。本来は生年月日や血液型などをお聞きしなければ出せない鑑定ですが、私の場合は直感で解ったりします。リカさんは間違いなくモノトーンのエネルギーをお持ちです」

「運氣とはいったいなんでしょう？」

「とても良い質問です。運氣を語るのには難しいですがお答えします。一言でいえば、出逢いのことです」
「出逢い……」

「そうです。出逢いとは人と人のご縁だけでなく、モノや土地のご縁など森羅万象、全てのご縁や出来事のことです。例えば、良い出逢いを得るには勉強を頑張って、良い大学を出て、良い会社就職してという一般的な幸福論は、一つの真理なのです。学歴と幸福の相関関係は令和の時代にも適用している。データにはっきりと出ています」

「まあ、確かに同じサラリーマンなら、大卒の方がお給料も高いし、章場の環境も良い。福利厚生もしっかりしていて、有休もとやすやすい。だから海外旅行にも行ける。確かに幸福かもしれないですね」

「親はそれを嫌というほど解っているから、口を酸っぱくして勉強しろと言う。ただし、占術などを使っていると解るのですが、親が高学歴だからと言って、子供も頭が良くなるわけではないようなのです。残念ながら、学歴では頭の良さは測れない」

「確かに学歴とは違う頭の良さを持っている人っていますよね」

「アキラ先生もそうです。彼は大学を出ていない。しかも学歴としては中卒です」

「え？ あの方中卒なんですか？」

「はい。高卒認定の資格は持ちますが、厳密に言えば学歴は中卒のままです」

「でも、あんなに長い文章がかかるなんて……。私より数倍頭がいい」

「アキラ先生の場合は文章に特化した命式をお持ちです。それに、偏差値教育を受けない方が良いケースだってある。でも、それはごく一部の人間しか与えられない才能です。だから、成功するにはどちらにせよ、頭を良くするしかない。つまり生涯学習です」

「生涯学習」

「ええ。そこで運氣の話に戻りますが、例えばアキラ先生が仮に大学までご卒業されていたとしたら、今のようなご活躍はされていないはずですよ。彼は大学に行けなかったことが、逆に運が良かったのです」

「そうなのですね！」

「では、逆に私たちの占術の総師の場合は、大学までストレートに通ったけれど、事業を起こすために大学を中退なされた。これは彼にとっては運が悪かったと言えるでしょう」

「なぜ？」

「それは総師自身が、大学くらい出とくべきだった、と後悔しているからなのです。後悔する選択をした場合はやはり魔が差したと言えない」

「魔が差す？」

「ええ。一般的にも邪魔とか言うじゃないですか。実は私たちが成功を目指す中で、もう少しで成功できると思って安心した矢先に邪魔が入ったりします。悪魔と神の戦いには終わりが無い。実は、成功を

一番邪魔しているのは自分自身です。多くの人は自分自身の判断で夢や希望を手放してしまう。もったいないです。もう少し我慢して続けていれば望み通りの未来が手に入ったのに……」

「諦めることがダメってことですか？」

「一概には言えないです。大抵の場合は、自分以外の何者になろうとして、無理して頑張り続けた結果、失敗する。実は成功しやすい人は自分の願望に対して正直で素直です。自分自身のことを良く知っている。だから、無理もしないしありのままでストレートに成功できる」

「なるほど。高望みしたり、自分以外の何者かになろうとするから見失う……」

「ひょっとして、アキラ先生に恋愛のご相談をされましたか？」

「ええ。でも、ずばっと見抜かれました。元カレとは最悪の相性だったこと。そして不思議なことを言われました」

「どのようなことですか？」

「わたしが一番願っていることほど大開運する、と……」

「なるほど。さすがアキラ先生ですね。運命の出逢いが近づいているか、すでに出逢っているか、という意味でしょうね」

「奥本さんはどう思います？」

「私は恋愛の専門ではないので詳しくは解りかねます。しかし、アキラ先生は恋愛のスペシャリストですので、先生がそう仰ったのなら、間違いないです。大開運します」

「ありがとうございます！　なんだか奥本先生とアキラ先生にみて貰えて自身が湧いてきました！」

「リカさん。ピンチはチャンスです」

「ピンチはチャンス？」

「はい。こうして開運セミナーに来られたということは、リカさんはピンチに直面していたことを物語っています。ですが、こうして開運セミナーに足を運んでくださった。リカさんはピンチの中のチャンスに気づき行動された。とても運気が上がっている証拠です」

「哲学的ですね。そういう世界好きです」

「陰徳あれば陽報あり」

「どういう意味ですか？」

「人知れず流した涙の分だけ幸せになれる、みたいな意味です。もうリカさんに涙は似合わない。ありのままに幸せになって下さいね！」

奥本が言うと、遠くの方のステージ上で勝どきの合図が出された。壇上の女性たちが「大開運するぞー！」と声をあげるとゲストたちが一斉に「おぉー！」とこぶしをあげて応えた。

「ちょうどよい時間だったみたいですね」

奥本がはにかんだ笑みを浮かべて「では、失礼します」と言って会場をあとにした。わたしは恍惚としてその場に立ちすくんでいた。

その日の深夜、強烈な喉の渇きと共に目覚めた。浅い眠りの中でみた夢は、一度もやったことがない麻雀を大学のサークル仲間に教えて貰いながら打つというものだった。2階の住人の騒音をかき消すためにつけているラジオの音が聞こえて、正気に戻った。

冷蔵庫から冷たい緑茶を取り出しグラスに入れて、一気に飲み干す。時計の針はカチカチと時を刻み、ちょうど2時半を過ぎたころ。空腹を感じてコンビニへと向かう。

化粧もせずに、上下黒のスウェットに白いダウンジャケットを羽織り財布とスマホを持ってアパートを出た。サイレンの音がこだましていることにも気に留めなかった。

コンビニで肉まんとかスタードマンを籠に入れた時だった。Xからの通知音が店内に響いて、ふとスマホをみた。

蒲田駅東口で火災が発生しました。現在も懸命な消化活動が続いています。なおこの火事によるけが人などの情報はまだ入っていません。

(正夢?)

わたしは思った。が、アニメみたいに頬をつねってみたら痛みを感じた。神経が通っている証拠だ。火事が一番多いのは0時から4時と聞いたことがある。さっきのサイレンは消防車か。野次馬に混ざって無駄に時間を費やすのはやめよう。わたしはまっすぐアパートに帰ることにした。

コンビニからわたしのアパートまでは歩いて3分ほどで着く。閑静な住宅街だ。蒲田で治安が悪いのは駅周辺だけだと思っていた。ストーカー被害にあうまでは。わたしはストーカー被害に遭いそうな容姿をしているのかもしれない。傍目からは真面目に見えて、誰にでも優しく、異性からの押しに弱く見える。

そんなことを思いながら歩いていたら今度は携帯が鳴った。

「もしもし。ヤマト君?」

「リカさん大丈夫ですか?」

「何が?」

「SNSで見ました。蒲田で火災が発生しているって……」

「ありがとう。でも、わたしは大丈夫だよ」

「今からリカさんを迎えに行きますので、待っててください」

「え? そんなに大したことではないよ」

「ストーカーの男と火災が関係しているように思います」

「火事とストーカーが？」

「今は説明している時間はありません。とにかくアパートにいて、チェーンもかけて誰も入れないで下さい。何かあったら真っ先に警察を呼んでください。僕はリカさんのアパートに着いたら電話しますから」

「……わかったわ」

「遅くなりましたけど、心より愛しています」

言ってヤマト君は通話を切った。

アパートまでの道のりがこんなに遠くに感じたことはなかった。閑静な住宅街も、Xでの火災の通知から、にわかに入が出てきて噂話に興じていたり、自転車に乗って駅の方面へと向かう若者もいた。

ストーカーの男の顔ははつきりわかっているし、なんなら喧嘩になったとしても、わたしの方が強いのではないかと錯覚するくらい、チビでハゲで運動不足は明らかなお小太りなのだ。恐れることはない。

一方通行の道をひた走る。喘息持ちのささやかな抵抗だ。息は上がりっぱなし。街灯はやけに目に染みる。

気づかなかった。今まで。ヤマト君への淡い恋心に。こんな火災程度でわざわざ五反田から蒲田に駆けつけてくれる、わたしだけの騎士。

ヤマト君とはじめて出逢ったあの病棟から見えた山や森、どんなに嫌なことがあっても、純粹無垢な笑顔を見るたびに、生きててよかったと思えた。今夜、星々は見えなかったとしても、わたしの心にともった月明りのような愛の灯だけは生涯かけて大切に護りたい。

一心不乱に走ってアパートに着いた。ヤマト君の言うがままに鍵をかけてチェーンをする。今日は不思議と2階の住人も静かだ。果たして、ヤマト君の言う、ストーカーと火災の関係は何なのだろうか。ダウンジャケットを脱がないまま、電気ストーブを付けた。居留守を使うのは昔から慣れている。

暗い部屋の中で想うのは、亡き母親のこと。あなたは男を見る目がないから、好きな人ができたら真っ先に私に紹介しなさいって。約束したはずなのに、わたしの晴れ姿を観る前に天国へ旅立ってしまった。寒いよ。おかあさん。真っ暗で怖いよ。こんな人生嫌だよ。

この暗闇の中、スマホの灯りだけが唯一の希望に思える。

ガサガサッと外から怪しい音が聞えた。バイクのイグニッションキーを回した時の、悪魔の悲鳴のような嫌な音。ヤマト君！ 祈るような気持ちでいた。

玄関のドアノブがガチャガチャと乱暴に回った。

（警察！ とにかく助けてー）わたしは110に緊急通報した。

ストーカーは鍵をあけてチェーンカッターで鎖を切った。

「どうされました。事件ですか？ 事故ですか？」

聞こえた時には、わたしは男に制圧されていた。

激しく衣服を引き裂くナイフの鋭い切れ味。わたしはこの男にレイプされた拳銃殺される。覚悟を決めた。

もう何もかもが遅かったのだ。産みの母親が不倫に走った罰が、娘の私に呪いのように降りかかってくる。そんな人生は終わりにしよう。

「やめろ！」

威勢の良い声が鳴り響いた。

バーンと玄関扉をあけ入ってくる。ヤマト君だ。

ヤマト君は後ろから男の腕を掴みナイフを取り上げようとする。男とヤマト君はもみ合いになり、わたしはスマホを拾い警察を呼んだ。

「てめえ！ 殺してやる！」

男はナイフを振りかざしヤマト君の腕を刺した。

「ああー！！！」

ヤマト君の腕から鮮血が噴出した。

男はマスクを外してこちらをみた。それはわたしが予想もしない人物だった。

「いよお。リカ」

「沖本……」

「いやあ。派手にやってくれたな。まさか警察まで呼ぶとはな」

沖本司は胸ポケットから煙草を取り出して火をつけた。

「ヤマト君を返してよ！」

「このくらいで死ぬと思ってるのか？ 相変わらず馬鹿だな、お前」

沖本は冷静さを取り戻したかのように言う。

「お前がおとなしく一発やらせてくれれば、それで済んだんだよ」

「馬鹿じゃないの……」

「住居不法侵入、傷害罪だけだとちょっと弱いんだよな」

「はあ？」

「死ぬときは一緒にとか馬鹿じゃねえのか。俺はもうこんな人生はごめんだ……」

「さっきから一体何をぶつぶつ言ってるのよ」

「死ぬ前に、一回だけ人を殺してみたくてな……」

「殺したいなら殺せばいいわ！」

わたしは叫んだ。

「お前さ……」

言って沖本はタバコをもみ消した。

「俺のために死ぬよ……」

言った瞬間に凍り付くような冷たさを腹部に感じた。

「死刑よりもっと罪が重い罰が欲しい」

沖本が言ってわたしを押し倒した。

「てめえ！ 何やってやがる！」

沖本は駆けつけた警察官に取り押さえられた。

「リカ……リカ！ 私だよ」

金子怜美は佐川リカに声をかける。

リカは虚ろな目で怜美を見つめる。

「どちらさまですか？」

「え？」

怜美は面を食らった。

「お花を持ってきたから飾っておくね！」

怜美は言って花瓶を手にする。

「ありがとうございます」

爽やかな春の風が吹き込む。

カーテンを揺らす、優しい風。

この風と共に、自由自在に生きていきたい。

リカは思った。

「あら、怜美さん。いらっしゃってたんですね！」

看護師の高野由紀が言う。

「由紀さん。久しぶりですね。外科の方は慣れましたか？」

怜美は言いながら小灯台に花を置いた。

「ええ。おかげ様で。ところで、ちょっと怜美さんにお話あるのですが、今いいですか？」

小春日和の庭を怜美と由紀は歩き、ベンチに腰をかけた。

「記憶喪失……ですか？」

怜美はまたもや面を食らった。

「ええ。私も信じられないのですけれど。リカさんがこの病院に来てからの記憶や沖本との事件の記憶が一切ないみたいなんです」

言って由紀は肩を落とした。

「まあ。でも、これから良い思い出をつくっていけばいいじゃない！」

毅然と怜美は言う。

「ですよー！」

「でも、可哀相だな……」

「何がですか？」

「ヤマト君とのことも忘れてるんでしょ？」

「ヤマト君ってうちの患者さんだった人ですか？」

「あれ？ 言ってなかったっけ？ ヤマト君は統合失調症で入院してたんだけど、リカさんのことが好きで毎日手紙を書いたり、リカさんと同じ大学に通いなおすために勉強してたの」

「ああ。やっぱりそうだ。和泉ヤマト君ですよ。怜美さんがファーストネームで呼ぶから解らなかった」

「ヤマト君はリカさんを沖本の魔の手から守ろうとして、腕に傷を負ってしまった……」

「でも、リカさんは記憶をなくしてしまった。切ないですね。それで、沖本はどうなったんですか？」

「うん、まだ事件から一か月しか経ってないから詳しいことは解ってないけれど、ASDだからって逃げ切れるとは考えていなかったみたい」

「計画的な犯行ってこと？」

「その辺りもまだ解ってない。けど、日頃からリカさんをストーカーしていた男が蒲田の火災の犯人だったみたい」

「ひょっとしてその男も精神障害かしら」

「いえ、刑事責任能力はあったと考えているみたいだよ」

「まさに謎が謎を呼ぶ、ですね」

「沖本と男が何かしらの利害関係にあったとしてもおかしくはない」

「なるほど。怜美さんも次に男を選ぶ時は気を付けてね！」

「え？ 知ってたの？」

「うふふ」

言って由紀は空を見上げた。

怜美ははじめて高野由紀と打ち解けた気がした。清々しい気持ちで由紀と同じ空を眺めた。

28

よく晴れた春の日。桜の薫り舞う病院の庭のベンチで、佐川リカはスターバックスコーヒーの新作のアイヌ莓ラテを片手に花見を楽しんでいた。遠くの方で、熱気あふれる声援が聞える。グラウンドではサッカーの試合が行われているのだ。

リカのすぐそばには、ベテランの看護師が付き添っている。

「リカさん。お体の具合良くなってきてよかったですね！」

喜々として看護師は言う。

「ええ。宮下さんや皆さんのお陰です」

リカは深々とお辞儀をする。

「春はなんだか人恋しくなりますね」

リカが言うと宮下は「ええ」と頷く。

「宮下さんにはいい人いるんですか？」

「いい人かどうかは解りかねますが、いちおう結婚してます」

言って宮下は笑った。

「いいなあ。一度でいいから結婚してみたかったな」

「リカさんはまだ29歳じゃないですか。これからですよ。どんな人がタイプなのですか？」

「嘘をつかない人。正直で素直で、自由に生きている人かなあ」

リカが言うと宮下は

「ああ。それなら一人だけ知ってます」

言って時計をみた。

「もう少しだけここで待っていてくださいね」

そう告げて宮下はその場を後にした。

一人きりになったリカはなぜだか泣きなくなった。

記憶喪失になっているらしいが、全ての記憶が亡くなったわけではない。はっきりとは思いつけないが、この病院のことも初めて来たような感覚はなかった。

リカの視線の先、遠くの方から一人の凛々しい男性が歩いてくるのが見えた。スーツ姿で手には花束を持っている。

青年はリカの前まで来きて言った。

「初めまして。和泉ヤマトと申します。お名前はなんですか？」

「はじめまして。佐川リカと申します」

「お隣に座ってもいいですか？」

「ええ。わたしの隣で良ければ……」

ヤマトの目は赤くなっているうっすらと雫が溢れた。

桜はまだ咲き始めたばかり。

満開になるころには、二人の想いは実るだろうか。

幾千の眠れぬ夜を超え

幾億の星の瞬く夜空に願ひし、夢。

たったひとりだけでいいから

愛し愛されたい。

そして

生涯を共に生きていくことを誓う。

その夜、リカは夢を観ていた。人気ピアニストの藤原涼子のライブにヤマトと行く夢を。いつだったか、涼子から言われた言葉だけは忘れていなかった。夢心地のままライブは終焉を迎え、サイン会は長蛇の列。リカは涼子に手紙を書いていた。それをどうしても、今夜渡したくて、こうして遙々、沖縄の地

まで追いかけてきた。その手紙には次のように書かれてあった。

親愛なる涼子先輩へ

今夜は涼子先輩が創られた曲【ロングディスタンス】が心にしました。いつだったか、涼子先輩のライブにお邪魔した際『会いたいのに会えない人。だけど心の距離が近い人』を大切に想ってつくられた曲だとお聴きした記憶があります。30歳近くにもなってようやくその言葉の意味が解り始めました。わたしは運命の人に出逢えました。次は、涼子先輩の番です。会いたいのに会えないなんて、言い訳です。今すぐ、会って気持ちを伝えてみて下さい。明日生きられる保証は誰にもないのですから。その気持ち熱いうちに。手遅れにならないうちに……。

2025年1月15日 佐川リカ

ロングディスタンス

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
